
妹はふろうふし

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹はふろうふし

【Zコード】

Z3213BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

高校二年生の風楼拓海は、ある日家に帰ると父にいきなり妹を紹介された。

妹の名前は風楼伏。

義理でも片親違いでもなく、父と母の娘で、戸籍上もきちんと登録されている妹だと説明される。

突きつけられた現状を受け入れざるを得ないが、いきなり年頃になつて紹介された妹はただの他人の女の子であり、そんな子といきなり同じ家に住むことになり緊張していた。

だが、妹の方は妹として振る舞い、しかも彼のベッドに潜り込んで来たりもする無邪気な女の子だった。

Pixiv小説にも投稿中

家に帰つたら妹がいた。（前書き）

この小説は年齢制限はありませんが、エロとまではいきませんがえつちな表現がふんだんに盛り込まれていますので、ご注意ください。

家に帰つたら妹がいた。

幕間 研究者が降り立つ街

「ここは地方の一都市。

いや、都市と呼べるほどの規模でもないだろう。だが、この辺りでは中核となる街であるため人の通りも多く、電車も数多く通つていて。

その中でも最も大きく、市の中心街に位置する駅。

そこは様々な人が行き交い、混み合つていて。

駅の改札は電車が来るたび多くの人々を吐き出している。

そんな改札が、人ごみの合間に彼らを吐き出した。

「なんか、普通の街ね、ここ。田舎でもなければ、都会でもない。一番つまらない街よね」

立ち止り、腰に手を付きながら、開口一番悪態をつくのは、ゴシッククロリータの服がよく似合う小柄な少女。

生意気そうな瞳がつまらなそうに駅周辺を眺め、そのたびにツイントールがゆらゆら揺れる。

キヤスターつき旅行バッグを持つて歩いている姿は、大都市の特定の場所へ行けばよく見られる光景だが、この辺りでは珍しく、行き交う人々も、彼女を振り返る。

中学の半ばくらいの容姿の、「ゴスロリスタイルで反抗期丸出しの態度は、あるいは大人から見れば微笑ましくも見えるかもしれない。だが、実際にはその周囲の人間からは、ただ面倒に感じることだろう。

「自分から来ておいて何言つてるんですか、こんな何もない街に。僕としてはさつさと帰つて研究でもして欲しいのですけど」ため息混じりに少女の言葉に答えるのは、彼女の隣を歩く男性。いや、まだ少年と言つてもいい年齢だらう。

長めの髪が似合つ美形だが、あまり表情を見せず、飄々としたところがあり、少女の我儘も聞き流して平然としていられるタイプである。

ある意味少女の天敵でもあり、周囲から見ればお似合いでもあると言える。

細身の身体に細身の黒いスースーがよく似合つ。
理知的な表情には、大人の良識と子供の悪戯つぽさが中途半端に同居していた。

「うるさいわね、樋田！ これも研究だつて言つてるでしょうが！」
「所長の研究は研究室で十分出来るはずです。お得意のアンチエイジングの観点から」

「だから、うるさい！ あんなのいくらやつて精度が良くなつても限界があるつて言つてるでしょうが！」

所長と呼ばれる少女と、部下と思われる樋田と呼ばれる少年。
端から見れば恋人の喧嘩、しかも少女の我儘を少年が流しているようにしか思えないが、彼らはれつきとした社会人である。
しかも、高度な研究者なのだ。

少女の名は水上結衣。

十歳でアメリカの大学に入学し、十四歳で博士の称号を得た天才少女だ。

その後日本に戻り、化粧品会社で画期的なアンチエイジング化粧品を開発し、大ヒットさせる。

それにより会社から億単位の報奨金を得て独立し、不老不死研究所を立ち上げた。

その研究所は主に、アンチエイジングの薬品や化粧品を開発し、企業に売る事で利益を得ているが、彼女が本当に研究がしたかったのは不老不死なのだ。

財力を得た彼女は、それを不老不死の研究につぎ込み、足りなくなればアンチエイジングで稼ぐ、というやり方でここまでやってきた。

見た目中学生に見える彼女は、こう見えて今年で十七歳である。アンチエイジングや不老不死の研究の一定の成果で、多少年齢を重ねずに入れられたのだ。

だが、それはただ単に経年を遅らせる事しか出来ない。

「彼女の求める本当の不老不死は、永遠の命なのだ。

「あんたも経営の事なんて考えなくともいいから、研究の手伝いくらいしなさいよ！ 何のためにあんた雇つてると思つてるのよ！」

「所長の尻拭いですか？」

「違うわっ！」

「ですが、僕はアンチエイジング以外、大抵所長の尻拭いしかやってませんよ？」

樋田は相変わらずの無表情で、上司であるはずの結衣に平然と言いい返す。

「うるさい！」

「はいはい、やれやれ。よつ、と」

樋田は重そうに荷物を持ち上げる。

彼の名は樋田信人。

彼女と同じ大学をこの歳で卒業している、同じく天才でもある。十六歳にして修士マスター、という彼女に比べれば多少見劣りする経歴だが、天才である事には変わりはない。

彼は修士マスターを卒業し、博士ドクターへの進級がほぼ決まっていた去年に、ちょうどその頃独立した結衣が大学へと乗り込んできて、うちに来い、と直接スカウトしたのだ。

結衣は自分の後輩に日本人で自分と同じ分野の研究をしている天才がいる、ということでスカウトし、樋田の方は既に大学では結衣のことは伝説になっていたため、その伝説の人のところで働くと想い、博士への進級をやめ、研究所へと来たのだ。

二人とも研究所立ち上げ当時十六歳で、今は十七歳。

その歳で結衣と樋田の研究は大いに成功し、研究所は巨万の利益を得た。

だが、その富は、結衣の一言により、不老不死などという途方も
ない研究へと費やされる事になった。

更に言えば、結衣の天才研究者とも、十七歳とも思えない容姿と態度。

最初は結衣を尊敬していた樋田も、徐々にそんな意識も削がれて行き、こんな態度を取るようになつたのだ。

「うかうか」「うかうか」で、何でここに来たなんですか？

「だから何度も言つてるでしちゃうが！　この町に不老不死伝説があるからよー。」

今にも爆発しそうな結衣。慣れてはいるので氣を使わない通田。

「ここに！　不老不死の！　ヒントが！　あるかも知れないって！　言つてるでしょうが！」

「所長 駄前で変な事呪はなしてくたわし」「うわーん！」

ついには泣き出す結衣。

一見中学生に見える二つの泣き顔に微笑ましくもある
樋田はこうしていつも溜飲を下げるのだ。

「分かりました。それそぞ聞いておひあし、ひ、ひあ 話してみてください」

「うん、あのね……」

泣いて子供のようになつた結衣がおずおずと話し始める。「あ、長くなつたら食事しながらこましょつ。何がおじつて

結衣の怒鳴り声は街へと消えていった。

「でね、この町には、人知れない不老不死伝説があるのよ」

ミートソースを口の周りにつけながら、結衣が言つ。

「そんなものは全国にいくらでもあって、これまでも回つて、全部眉唾だつたじゃないですか」

ペペロンチーノを上品に食べる樋田が答える。

「そう、ここまで回つてきた不老不死伝説は大抵嘘や、情報ネットワークが発達していない時代の噂だつたわね」

「ま、不老不死なんてそんなもんですよ。峠の茶屋に親父がいる。旅人がそこで茶を飲んで、三十年後にまた行くと同じように親父がいる。そのときに一緒に連れて行つた子供が成長し、更に三十年後にまた行つたら、それでも同じ親父がいる。ああ、あの茶屋の親父は不老不死だ、なんていう」

「そうね、それは代替わりしてることに気がつかない人間の勘違いに過ぎないわ。後は三百年生きた高僧、なんてのも、ただ単に死んだ事を教えられてない周囲の村の人たちが何百年も高僧の存在を言い伝えて來たつてだけで」

「で、どこに行つてもそれを観光に利用してるだけ。本当に不老不死があるなら、今も本人が生きているはずで、それがいらないのに不老不死の里もないもんです」

樋田がやれやれ、と首を振る。

「でもね、ここは見ても分かる通り、普通の町よ。観光にも利用していいし、不老不死の里つてことも誰も知らない。なんだか、逆に怪しくない？ 本当に不老不死の人人がいて、それを隠しているんじゃないかしら？」

「僕は所長を研究所に隠しておきたいですけどね」

「またあんたは！ 何でそう非協力的なのよ！」

食べ終わつた結衣は、フォークを樋田に向けて怒る。

「アンチエイジングに関する研究なら、いくらでも協力しますよ」

樋田はナップキンで結衣の口の周りを拭つてやる。

「僕は不老不死なんてものの研究に、人生を無駄に使いたくないの

です。老病死が待ち受ける人間として、僕はアンチエイジングを研究してみたいのです」

「帰つたらやるわよ！」ここしばらく滞在して、また帰つたらし

ばらくそつちの研究するから…」

「分かりましたよ。じゃ、まず何をすればいいんでしょうかね？」

「とりあえずは、市の歴史が分かる施設や市役所に行つて調査しま

しょ」

「はいはい、分かりました」

樋田は面倒くさそうな表情で食後のコーヒーを飲む。

「つー？」

エスプレッソを頼んだはずなのだが、甘つたるミルクティーが来ていて、味の違和感で驚く。

「ヴァーー！」

田の前にはミルクティーと思つてエスプレッソを飲んだ結衣の泣き顔があつた。

「いや、そつちはさすがに色で分かるでしきう」

呆れながらも、樋田はナップキンを手に取つた。

妹がふるうふし

親父の一言に、俺はしばらく何の反応もできなかつた。

無理もない、いきなり衝撃的なことを言われれば大抵はこうなるんじやないかと思つ。

俺は自分の家の居間の前に、鞄すらまだ持つたまま立つていた。帰つてきて、親父に呼ばれた。

ああ、ここまで何の不思議もない。

昼間になんで親父がいるのかと言えば、一ートだからだが、そんなことは今どうでもいい。

そこに入つてみると、親父と母さんと、後、見たこともない女の子が、こつちを見て笑つていた。

女の子は幼さも多分に残した表情をしているが、俺と大して歳は違わないだろう。

肩のあたりで切りそろえられた髪は、この子を人形のよつに綺麗に見せていた。

大きめの目がにこり、とこちらに笑いかける。
あ、可愛い。

そう思つた瞬間だつた。

「この子はお前の妹だ」

親父の言つた一言に、俺は固まつてしまつたのだ。
真つ白になり、再起動して立ち上がるまで、およそ一分くらいの時間がかかつた。

まず、何から確認しようか。

俺は風楼拓海、風楼家の子供で、一人っ子だ。

近所の公立高校に通う一年生で、成績は、まあ普通だ。

俺には一ートの親父と専業主婦の母さんしか家族はおらず、三人でまあ、喧嘩をしないわけでもないが仲良く暮らしている。
もちろんこれまで妹なんかいたことはないし、これからもいることはないだろう。

そう思つていた俺の知識に、思いがけない情報が降りかかつてき
た。

「えつと……」

俺はようやく、口を開いた。

「どつちの浮氣？」

俺は一人を交互に指さしながら尋ねた。

「何言つてるんだ、お父さんとお母さんが浮氣なんてするわけない
だろ？ ずっと家にいるのに」

「そうよ、近所でも冬眠中の熊のような夫婦つて有名なんだから」

「それ、褒め言葉じゃないから。ていうか、そろそろ働けよ。俺が

生まれて以来働いてないだろ……って、今はそれはどうでもいい。
あ、じゃあ養子か何かか？」

浮氣して出来た子が、もう一人の親が死んで訪ねてきたってわけ
でもないなら、養子しかないんだろうな。

「違う。父さんと母さんが十六年前に愛し合つて、十五年前に生ま
れた子だ」

親父が真剣な顔で言つ。

親父は嘘、大げさ、紛らわしい事が大好きだが、この真剣な表情
は本物だろう。

「……詳しく述べてくれ」

「うむ……お前が生まれてすぐのある日、母さんがどうからか、ナ
ース服を手に入れてきてな、それを着た母さんを見ていたら、私も
ムラムラとして……」

「プレイの内容なんてどうでもいい！ この子が妹つて言つんなら、
今までどこにいて、何でここにいなかつたんだよ！ あと、母さん
も頬赤らめるな！」

息子にリアルな性を話すことほもう珍しくもなんともないのだが、
まじめに話している時に言わるとイライラする。

「ふむ、やつぱり話さなければならないか……」

親父が腕を組んで真剣な顔をする。

「この子は生まれつき身体が弱くてな。フランスの医療機関でずつ
と治療をしていたんだ。最近になつてやつと治療法が見つかり、完
治したので帰国したんだ。いつ死ぬか分からなかつたから、お前に
余計な精神的負担をかけたくなかったので、黙つていた。すまなか
つたな」

親父は暗記していたかのよつて、一気に言葉を紡ぐ。

怪しい。

そのいいわけは怪しき。

「なあ、あんた」

俺は妹と称する女の子に聞いてみるとする。

「なあに、お兄ちゃん？」

につこり笑つて少し首を傾げる表情がとても可愛くて、俺の中で「ここの子はもしかすると本当に妹かもしねー」という歯止めがなくなれば、この瞬間に恋に落ちていたかもしねー。

「あ、えつと……ちょっと、フランス語を喋つてくれないか？」

俺は目をそらしながらも、そんなことを言った。

「いいよ。イカノテジユボーン」

その子は、流暢な、おそらくフランス語で何かを言った。

「ナガジユバーン」

ん？

ナガジユバーン……長襦袢？

いやいや、たまたま日本語っぽく聞こえるフランス語だろう。その前の方は日本語には聞こえ……。

イカの手十本？

「ポンジユース？」

「ダウトー・心の太陽ダウトー・フランスと愛媛に謝れ！」

何のことはない、日本語をフランス語っぽく発音してただけだ。一瞬でもだまされた自分が恥ずかしい。

「ばれちゃつた」

てへ、って感じで可愛く微笑む女子。

「どうしてそんな嘘をついた！」

俺は親父の胸ぐらをつかんだ。

「待つて、お兄ちゃん！」

女子が、俺の腕をつかんで止める。

「ちょっと後にしてくれ、あと、お兄ちゃんとか呼ぶな！」

「だつてお兄ちゃんだもん！」

強く俺の腕をつかむ女子で、強い口調でわざわざわると、俺も少しは手を緩めてしまう。

その隙に親父は逃げる。

俺は追うことはなかった。

だから、女の子も俺の腕を離す。

「お父さんの言つてた事はほんぢテタラメだけど、私の身体が弱くて、学校に行けずに治療してたのは本当なんだよ」

「……いや、元気そうじやん……」

俺の腕をつかんだ力は、少なくとも病人のそれじゃなかつた。

「だから！ 元気になつたの！」

強い主張、いや、若干怒り氣味の口調で半ば怒鳴る女の子。そう言わると、嘘か本当かはともかく、これ以上の反論もできない。

ただ幼くて可愛い女の子に見えたが、實際はちゃんと芯があつて、強く物も言える子のようだ。

俺の目を見て離さない。

信じて欲しいとその目が訴えている。

「いや、まあ、信用してないってわけじゃないんだけど……」

ここまでする以上、本当のことか、とんでもない悪女の素質を持つ子かのどちらかだが、そもそも俺の疑問には一切答えてはいないので、俺のわだかまりは解けることはない。

「私は、フランスなんかには行つてないよ？ ずっと、この家で治療に専念してたんだよ」

訴えるような目でまつすぐ見つめられてそう言つ。

こんな可愛い女の子に、結構近い距離からそう言わると信じるしかないのだが、それにしてもまずは俺のわだかまりを解いてからだ。

「いや、信じたいのは山々だけど、俺もこの家に生まれた時から住んでるんだよ。でも、一度も会つたことがないだろ？」

「この子を信じたいと思つても、その事実は変えようがない。」

ここにいた、とこの子が主張するが、いくらなんでも十数年間、俺と一度も会わなかつたなんてことはないだろ？

「それは、お兄ちゃんからずっと隠れて生活してたから仕方がないよ。母は出てきたりしてたんだけど」

「いや、それにしても、この家に隠れるといつなんでもいいかも……」

言いかけて俺は一つの事実を思い出した。

「もしかして、あかずの間か……？」

俺はおそるおそる聞いてみた。

「へえ、お兄ちゃんはあかずの間つて呼んでるんだ。うん、そうだよ。お兄ちゃんの部屋の隣だよ？」

その子は、あっけらかんとそう言つて笑つた。

あかずの間つていうのは、俺の部屋の隣にある部屋のことだ。小さじこりに、そこおばけが出ると言われて入らなくなつた部屋で、しかもそこから物音も聞こえてきたので、子供の頃は本当に怖かつた。

だが、その気配も物音も、いつに間にか慣れ、今では特に気にするとはなくなつたのだが、確かに今でも気配はしていた。

だが、特に疑問に思つことはなく、今までそこに入つことはなかつた。

まさかその向いの子がこれまでずっと住んでいて、今も住んでるつて言つのか？

いやいや、さすがにそれはないだろ？

いくらなんでもそこまで隠す意味がない。

「私は特殊な病気だから、あまり人と会えなかつたんだ」

俺の表情に疑惑を見た彼女が、そんなことを言つ。

「でも、私はずっとお兄ちゃんの気配や物音を感じていたんだよ！」

会えなかつたけど、ずっと」

女の子は、大切な何かを抱きしめるよつて胸に手を当てる。

それが何かは分からなかつたけど、俺は確かにこの子の気配を感じていた。

それと同じように、この子はそれを感じたんだろう。

「お兄ちゃんは、いつも何かのトレーニングをしてるよね？」

「？ してないとどうけど？」

無邪気な表情でそう言われるが、俺には心当たりがなかつた。

「でも、二十一時^じになると、毎日ものすごい勢いで何かをこすってるよね？ 息も荒くなるくらいだから、てっきり何かのトレーニングかと……」

「ストップ！ わかった！ 信じよう！ お前はこの家にいた！」
完全無防備だった俺は、この子に毎日それを聞かせてたのかと思うと、なんていうか、申し訳なくなってきた。

確かにそこまで知っているなら、あそこに住んでいたつてのも事実だろう。

「だが、それが兄妹っていう証拠にはならないぞ。他人だつて一緒に住むこともあるだろう」

赤の他人の女の子にあれを聞かせてたかと思うと、是が非でも妹だと思い込んでいた方がいいんだろうけど、そこはやっぱり確認しておく方がいいだろう。

「お前はそういうと思った。だから、こんなものを用意した」
親父がテーブルの上に乗せたのは、一枚の書類だ。
よくは分からぬが、戸籍に関する書類らしい。
その家族の欄にはこう書かれていた。

世帯主 風樓勝徳

妻 祥陽

長男 拓海

長女 伏

「……ふせ？」

「ふしつて読むんだよ、お兄ちゃん」

また、妙な名前だな、と思つたが、目の前に本人がいるので黙つていた。

まあ、この親父が付けた名前だと考えるにこんなもんか。

ともかく、戸籍を見せられると信じるしかない。

これが親父の偽装つてこともないわけじゃないが、どっちにしろ、

この子がこれからもこの家に住むのは変わらない事実なんだ。うつ。それなら妹にしておいた方がいい。

こんな可愛い子が妹じゃないと思うと、どうにかなってしまう。

「これからはよろしくね、お兄ちゃん?」

腕を後ろに組み、少し首を傾げながら俺を見上げてうつこり笑う。伏。

これだけ可愛い妹がいるのは、幸せでしかない。

そう思うことにした。

「ああ、分かったよ、えつと、伏」

「うん」

俺が名前を呼ぶと、伏は嬉しそうにびょん、と跳ねる。サラサラの髪もふわりと跳ねる。

「で、お前の行つてる高校に転入届を出して、明日から通つことになつた。面倒を見てやつてくれ」

「ああ、分かった。まあ、一緒に高校まで送つてくへりこじか出来ないけどな」

「それでいいよ。私、頑張るから!」

何をだよ、と思ったが、そのあまりにも元気な様子を、俺は微笑ましく見ているだけだった。

妹を刺しても死ななかつた。

時計は二十一時を回つた。

風呂にも入つたし、いつもなら部屋の電気を消して、そろそろ寝る頃だ。

だが俺はびづきよづかと迷つてこることがあつた。

それは、まあ、いつも日課のことだ。

俺はベッドに入つて寝る前に、いつも日課をこなしているんだが、これからはなかなかそれが出来ない。

隣に伏がいて、それが聞こえているからだ。
とはいえ、俺も健全な男子であり、我慢するといふことはありますまい。

だからどうしたもんかと悩んでいた。

ま、悩んでも仕方がない、出来るだけ静かにやるか。

俺はそう思いながら、電気を消して、ベッドに潜り込んだ。
さて、じやあ、やるか、などと思つていた時のことだ。

かちやり

入り口のドアが、静かに開いた。

親父か誰かか、などと思つて電気をつけるとしたとき。

「お兄ちゃん？ 起きてる？」

小さな伏の声が聞こえた。

「ふ、伏！？」

俺は慌てて飛び起きて、電気をつけるとする。

伏は入り口のドアを閉めると、そのまま俺にとびかかってきて、俺はベッドの上に押し倒される。

「ぐつ……！」

風呂上がりのシャンプーの香りと、あとほんのひとつ伏自身の香り。

柔らかい、伏の身体が俺の胸にのしかかり、俺は全ての動作を停止せざるを得なくなつた。

何？

何が起きてんの？

俺の疑問に答える者はいない。

唯一答えてくれそうな伏は、俺の胸に抱きついたまま、俺の耳元に囁き言つた。

「今日は一緒に寝よ？」

ああ、なんだ。

一緒に寝たかっただけか。

しようがないな、それならじょと布団を開けて つて。

「そんなわけにいくかっ！」

俺は起き上がり伏をどかせる。

「でも、兄妹だよ？ 兄妹って一緒に寝たりするものでしょ？」

何の迷いもなく、そんなことを言い出す伏。

俺は起き上がり伏をどかせる。

それなら一緒に寝ても……いやいやいや！

「それは子供の頃の話だ！ 高校生の兄妹の話じゃない！」

「でも、お父さんの持つてるゲームやアニメではみんな一緒に寝てるよ？」

あのクソ親父、娘に向てもんやらせてるんだ。

「それはギャルゲやアニメだからだ！」

全く、一般常識がないのかよ、ほんには

「……だめ？」

ベッドの隅に寄り、上田遣いでこいつを見る伏。

そう言えば、一般常識も何も、普通の生活なんて今まで出来てなかつたんだよな、この子。

俺の妹なのに、俺すらも会つたことがなくて、この歳まで普通の生活なんてしたことがなかつたんだろうな。

そう考へると、一日くら……。

いやいやいや！

駄目だ駄目だ！

伏がいくら無邪気な妹でも、高校生バディを持つた女の子であることには一ミリも変わりがないし！

この子がよくても、俺が困る。

隣に女の子が寝てたら俺が眠れない。

子供の頃から妹なら何とでもなるかもしねないが、成長してからいきなり妹と言われても、頭では納得しても、心までは納得していない。

可哀想だが、ここはお引取り願おう。

「なあ、伏。やつぱりさ

「何、お兄ちゃん？」

声は、俺のすぐ隣の耳元から聞こえてきた。

「……え？」

振り向くと、そこには鼻をぶつけそうな位置に、伏の顔があつた。

「な、何だ！？」

伏は俺の許可もなく俺の布団に潜り込み、隣に寝ていたのだ。俺はあまりの顔の近さに、のけぞってしまった。すると、ずい、とその分伏が攻め込んできた。

「じゃ、おやすみ～」

「ちょっと待て！」

俺は慌てて起き上がる。

「もう！早く寝よつよーー明日から学校なんだからーー！」
伏に叱られる。

ああ、そう言えば明日からだったな、伏の学校生活。

初めてだし、期待もあるだろうが不安もあるだろうし、何しろ病気からの復帰だ。体力はあつたほうがいいだろう。

「そうだな。悪い。じゃ、寝るか」

俺はもう一度横になり、布団をかけて目を閉じ……。

「ノウツー！」

危うく乗るところだった。

「とにかく！自分の部屋で寝ろー。ほりー。」

俺は伏を押し出そうと、手を伏に向けて押し込む。

むにゅう

「さやあんー！」

俺の手は、軽い弾力と共に、伏へと押し込まれた。
ちょうど俺の押し込んだ手は伏の胸に当たり、癖になりそうな柔らかな弾力が、俺の腕力にさやかな抵抗をした。
しかも伏はノンブラジャー。

豊満とまでも言えず、どちらかと言つとやせていて胸もない伏だが、このさやかなふくらみが女の子である事を主張していた。
「お、お兄ちゃん……」

俺がその感触を呆然としつつも楽しんでいたら、伏が切なげな声を上げたので慌てて手を戻す。

「あ、ごめー！ いやー！ そのつー！」

妹の胸に手を押し付け、その柔らかさを楽しんでいた俺は、血口嫌悪では済まされないほどの衝撃を受けて混乱していた。
何より、せつきの心地いい感触が忘れられないでいる。

田課も済ませていない俺には、あまりにも刺激が強すぎた。

「？ どうしてもぞもぞしてるの、お兄ちゃん？」

「何でもないです！」

俺は元気なマイサンを抑えようと、必死にこれまでのことを忘却のかなたへと追いやおうとしていた。

「そうなの？ じゃ、そろそろ寝ようか？」

そう言つと、伏は体を俺に寄せ、腕をぎゅっと抱きしめてきた。
さややかな胸が俺の二の腕のあたりに押し付けられている。
もちろんノンブラジャー。

「いやー！ おまつー！ ちゅー！」

俺は慌てるが、押せば伏の胸に腕を押し込む事になるし、引けばその分伏が攻め込んでくる。

どつちにしろ、俺のピンチには変わりはない。

俺は身動きが取れないまま、固まつた。

「おやすみ、お兄ちゃん」

そんな嬉しそうな声が耳元から聞こえた。

身動きの取れない俺は、それにこり返すしかなかつた。

「おやすみ」

目覚めは思つたほど悪くなかった。

うん、あんな状態で眠れるわけがないだろう、なんて思つていたけれど、以外にも早く眠つてしまつた。

何ていうか、心地よかつたと言つてもいい。

妹とはいえ、女の子の寝息を聞きながら眠りに落ちていくというのは悪くない。

悪くないどころか最高なのかも知れない。

こういうのはあと五年か十年してから体験するものだと思つていたが、こんなに早く経験してしまつた。

俺の今後の人生に影響しなければいいんだがな。

ま、そんな事を考えながら目を開ける。

隣にはまだ寝息を立てている伏。

俺はそれをじつと見ていた。

こいつは本当に可愛いんだよな。

何だかんだで親父は人格的にはクズだが、顔は悪くないし、母さんも元々美人だつたらしいから、まあ、遺伝子的にも悪くないんだろうけどさ。

それにもしても可愛過ぎないか？

いや、まあ、自分の事を言うのは本当に気が引けるが、俺の顔も

親の遺伝子を引き継いで、そんなに悪くはない。

だが、こいつの顔はそういう、前から歩いてきて、お、可愛い、と思う程度じゃないんだよな。

何ていうか、振り返る毎びの美少女つて言えばいいんだろ？ か。 そのレベルの顔なんだよな。

正直、妹でなければ、俺の理性は破壊されていたかも知れない。 おつと、妹の寝顔を覗き込んでニヤニヤしてる暇じゃない。

もう起きる時間だ。

「おい、伏、起きろ、時間だぞ？」

「ん……んにゃー……」

俺の揺さぶりに反応した伏は、それがうつとおじことばかりに寝返りを打つ。

「そろそろ起きろー、学校に遅れるぞ？」

俺は更に強く揺さぶる。

「にゃああああ……」

伏はゆっくりと目を開く。
が、また閉じる。

女の子は大抵血圧だと聞いてたがそれは本当なんだな。

「しうがねえなあ」

俺は勢いよく布団をはがしてやる。

「どうだ、これで起き……」

俺の動作はそこで固まつた。

伏のパジャマは乱れきついていて、何ていうか、胸とかパンツとか丸見え状態だつたのだ。

え？

俺の隣で寝てたんだろ？

何でこんな状態になるの？

俺は伏の衣服を直そうか、いや、身体に触れたらいどうつ、などと思つてゐるうちに、伏の目が開いた。

伏の目が徐々に焦点を合わせ、俺を認識した。

「おはよう、お兄ちゃん」

まだ少し眠そうに田をひすりながらそう言った。

だから俺はとりあえずそう返した。

「ふああああああ……」

伏はあくびをしながら

伏はあぐひをしながら伸びをする。

わわわがさんかほりと見えたり見えなかたりす。

「起きないの、お兄ちゃん？」

今度は逆に俺がそう聞かれた。

「お、おう、起きるけどさ……着替えをしてから下に降りていくか

「うん、じゃあねー

伏がやつと部屋を出て行つた。

心經

俺はほんととしては隠していた股間を放り出した
いや、これは朝立ちだ。

それ以外の何でもない!

昨日 我慢したからなあ

俺は、パンを暴れたままはさせながら、パン二つはたたかんでいいだ。

「あ、お兄ちゃん！」

はひ

俺は腰を曲げてしゃがみこむ

「回」二二二

俺は必死に股間を守りながら、そう答える。

え、制服の上に何着るの？」

「そっかあ、分かったよ、ありがとうお兄ちゃん」

何が分かったのか知らないが、伏は俺の答えに満足して出て行つた。

俺はほつとして起き上がつたが、いつまた伏が入つてくるかと思うと、しばらくは警戒したままだつた。

ようやくマイサンが納まつたところで、制服に着替え、下に降りた。

「おはよ、母さん」

「おはよう

俺が座ると、焼かれたトーストとサラダが運ばれる。

俺はそれを食べ、テレビを見ていた。

「おはよう、お兄ちゃん！」

その後すぐに伏が降りてきて、俺に挨拶をする。さつきまで一緒に寝てたのに挨拶もないもんだ。いや、それを母さんに悟らせないためにあえて言つたのかもな。伏の前にもすぐに朝食が運ばれてくる。

あれ？ こいつ今、母さんに挨拶したか？

「ねえ、お兄ちゃんの高校つてどんなところ？」

そんな疑問を考える間もなく、伏が質問をしてきた。

「ん？ いや、普通の高校だぞ？ 変な校則もない代わりに、大抵の校則もあるつて感じの」

「ふうん、普通かあ」

何が嬉しいのか知らないが、嬉しそうにそつ言つて、期待に満ちた表情でパンを頬張つていた。

「よし、急ぐぞ、さつさと食べろよ」

「うんっ！」

そう言いながら、大きく口を開け、パンを頬張つた。

今朝はいつもより少しだけ早く家を出た。

授業が始まるギリギリに学校に着けばいい俺とは違い、伏は転入のための挨拶なんてものがあるからだ。

だから、登校中に出会つ奴らもいつもとは違つた。

「おはよう拓海くん」

横からいの声に振り返ると、そこにはクラスの友達である真希がいた。

長い、手入れされたサラサラの髪が綺麗な同級生だ。

こいつは中学時代から何回かクラスメートになつた事もあり、女子の中では一番仲がいい。

ぶつちやけて言えばこの子は俺に惚れてると思つてたけど、俺はそれに気がつかないフリをしている。

この子は普段はおとなしくてスタイルもいいし、顔も可愛い子なんだが、ちょっとダークというかヤンでテレなところもあり、ちょっと面倒だな、と思うからだ。

まあ、悪い奴じやない。

「おはよう、真希」

「今日は早いのね？」

「ああ、こいつ連れてるからな」

俺は隣にいた伏を指差す。

真希の顔がみるみるヤミの世界へと変わつていく。

「え？ やだ……拓海くんにそんな人がいたなんて……」

「妹だからさ、そのわら人形をさつさとしまつてくれ」

俺は真希が手に持つていた人形と五寸釘を、真希の鞄に押し込んだ。

だ。

「妹……？」

真希はじつと伏を見る。

伏は物怖じもせずに真希に笑いかける。

「……拓海くんと同じ光を持つてる」

「何だよ光つて」

ここでオーラとかそういう事を言われたら怖いけど、まあ真希なら仕方がない。

真希はそれには答えずに伏に手を差し出す。

「よろしくね、えっと……」

「伏です」

「よろしく、伏ちゃん」

伏はその手を握り返し、握手が成立する。

「はいっ、よろしくお願ひします、真希先輩！」

伏の輝かしい笑顔が、真希と俺を照らした。

あ、光ってこれが。

俺はこんなもん持つてないけどな。

そんなことがありながらも、三人で登校を続け、学校へと到着する。

「じゃ職員室はあっちだから」

「うん、分かった！　じゃ、また後で！」

元気にそう言つと、伏は職員室の方へと駆けて行つた。

「元気な子ね……」

「まあな。あれでちょっと今まで病気だつたって言つんだからな」「羨ましい……」

伏の消えていった方向を眺めながら、真希がつぶやくように言つ。

「いや、真希だって見た目は悪くないし、笑つてればあんなもんだろ？」

「……妬ましい」

「だからさ、もっと笑……妬！？　何で？　どうして？　俺の妹何か粗相でもしたか！？」

その問いに答えずに、真希は教室へと向かったので、俺も慌ててついて行つた。

午前中は伏が気がかりで仕方がなかつたが、まあ、授業に集中していないのはいつも通りなのであまり問題もなく昼休みを迎えた。いつもの昼なら、俺や真希ら数人の友達で昼を食べるところだが、真希を含めて何人かが選択で調理実習だつた。

何人かというか、ほぼ全員で、残つたのは俺と斎藤つて女子だけ

だ。

男もみんな調理実習やつてるからな。

で、その斎藤つて奴は真希に悪いからというよく分からぬ理由で俺との昼食を辞退したので、俺は一人で食べる事になった。

斎藤の恐怖に引きつった笑顔が忘れられない。

真希は普段どんな事やってんだ。

どうせ一人なら普段したことのないことをしてやれ、などと思い、俺は校庭に出てベンチに腰かけてみた。

「ま、食べるのはいつもと同じでパンだがな」

俺はそうつぶやきながら、整然とした行列で購入したパンの袋を開く。

「……拓海くんが、一人……」

背後から、いや頭上からそんな声が聞こえてきた。

「かわいそう……かわいそう……かわいそう……」

おそらく真希だが、何だかヤンるので、放つておく事にした。ヤミモードに入っていると、色々厄介なのだ。

俺はパンを一口頬張る。

「あんな大量生産のパン……かわいそう……」

ほつとけよ、とつっこみ返しそうになるのを、ギリギリで止める。

「あ、お兄ちゃん!」

向こうから、手を真上に上げながら振つて走つてくるのは伏だ。頭上の声とは違い、底抜けに明るい声だ。

「羨ましい……妬ましい……嫉ましい……」

声のヤミ度が深まって行つているが、気にしない。

おそらくこの後呪詛が聞こえてくるが、いちいち相手にはしていない。

カツ!

大きな音がしたので、隣を見ると、包丁が突き刺さっていた。

「おまつ！ 危ないだろ！」

これには思わず突っ込んでしまった。

「嬉しい……構ってくれた……」

校舎の三階の窓。

目が見えるか見えないかの頭部が見え隠れする。あんなところから包丁落としたら危ないだろうが。だが、いちいち上つて怒りに行くほどでもないし、それはそれであいつを喜ばせるだけだ。

とりあえず包丁を抜いた。

後で返しに行こう。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

やつとこっちに到着した伏が聞いてくるが、この状況をどう説明したらいいかな？

「いや、実はさ、真希が三階からこの包丁を」

俺が包丁を伏に見せようと、前に出した瞬間の事だ。

「あっ！」

伏が何かにつまずいて転ぶ。

俺はそれに気づき、抱き止めようと、手を出す。

その手に包丁が握られている事を忘れて。

ざくり。

「あ……」

嫌な、感触がした。

「ふ……し……」

伏の鳩尾の下辺り。

そこに、包丁は深々と刺さっていた。

柄を持っているはずの俺の手が、伏の腹に接触するくらい、刃のすべてが伏の体内に飲み込まれ、伏の細い体躯を貫こうとしていた。俺は状況を飲み込めずについた。

いや、飲み込みたくない、理解したくないといつ心の抵抗が、理解を遅らせていた。

顔に降りかかってるのは、俺の妹の髪と、シャンプーの香り。力なく俺にしなだれかかって来るのは、俺の妹の身体。状況は変えられない。

伏の温もりが伝わって来るほど、その現実を受け入れざるを得なかつた。

俺は、伏を包丁で刺した。

出来たばかりの妹を殺してしまつた。

手の震えは止まらない。

頭が真っ白になる。

悲しいとか、怖いとか、そんな感情とは違う、人を殺したといつ、

受け入れられない重みをただただ感じていた。

息苦しくなつてきた事で、やつと自分が息を止めている事を理解し、大きく息を吐いた時。

「いつたあああ！」

伏の明るい声が聞こえた。

「……へ？」

なんだ？ 何が起こつたんだ？

「痛いよもう！ お兄ちゃんつてば！」

伏はもぞもぞと立ち上がり、刺さつていた包丁を、ぽん、と引き抜く。

「ええつ！？」

包丁をベンチに置くと、くるん、と俺を振り返る。

「お兄ちゃんはいつも一人でご飯食べてるの？」

何事もなかつたかのように、聞いてきた。

「いやいやいや！」

この数秒のあまりの非現実的な光景に、俺が混乱していなかつたと言えば嘘になる。

「え？ さやあつ！」

俺は伏の制服をまくり上げ、包丁が刺さった辺りの腹部をまさぐつてみた。

薄い筋肉と、薄い脂肪、薄い皮膚。

一ノ川の水

傷一つなし、白く綺

卷之三

俺の気のせいだつたつてことか？

いや、そんなわけがない！

俺は確かに、伏を刺した。

感触もあつた。

だけど、現に刺した痕がない。

「どうしてだ、あれ？」

俺が夢でも見たつて言うのか？

お兄ちゃん……恥ずかしいよ……綺きに帰つてから……」

犬が少こ艶つまゝ声で言つので正氣を取り戻した奄

俺は伏の制服をまくり上げ、腹をまさぐつていって、伏はそれをどうしてだか、上氣して受ナ入れていた。

「わ、悪いっ！」

俺は 悔てて 仇を離した

頭上からは既にヤミを超えてひどい有様になつていていた。

それどころじゃない。

一 伏、お前一 体、何者なんだよ？」

「俺は少しだけ恐怖を感じた。
何者って、お兄ちゃんの妹が

「何者つて、お兄ちゃんの妹だよ?」

「嘘つけっ！ 本当は何なんだよ！ 何で俺んちにこりんんだよ
こいつは妹じゃない。人間ですらない。
そんな恐怖が俺を支配する。

冷静であつたとは言えないだろ。」
あんなもんを見せられて冷静でいられるわけもない。

「……それでも」

伏は少し悲しげに微笑み、だが強い強調を込めて言つ。
「私は、お兄ちゃんの妹だよ？」

「……！」

その、あまりに強い、言い換えれば必死の表情に、俺は次の言葉
を口には出来なかつた。

こいつにも色々事情があるだろ。

それも考えずに化け物扱いしたのは確かに悪かつたかもしれない。
だが、それで何が変わるわけじゃない。

化け物であるうがなかろうが、こいつが刺しても死なないのは事
実だし、俺の家で俺の妹を名乗つて住んでいるのも事実だ。

「怒つたりしたのは悪かった。だが、本当のところを教えてくれ。

お前が俺の妹かどうかもそれで決める」

俺はなるべく冷静な態度で、伏に向き合つて、そう言つた。

「……分かった、ちゃんと言つよ」

伏が少し寂しげにそう言つた。

「でも、ここじゃ言えないんだ。家に帰つてから、お父さんと一緒に

に言つから」

そう言つて最後に寂しげに笑いながら走り去つて行つた。
俺はただ、去つていく姿を見つめるだけだつた。

妹が俺に迫ってきた。

幕間 研究者の陰謀

「店主を呼べ！」

「な、何よ急に」

驚いて箸を落としそうになる結衣。

「今は鮎の季節にあらず！ これが季節の魚とは片腹痛い！」

「別にいいじゃないのよ。この季節だって鮎は獲れるでしょ？」

「所長は分かつていません！ 季節の魚とは、その魚が一番おいしい時期のものですよ」

「あんたがそんなに季節の魚にこだわりがあるとは初耳だわ

「奇遇ですね、僕もです」

平然と言い返す樋田。

「今後フィッシュ・アンド・チップス以外の魚は食べるな！」

怒りに任せて立ち上がる結衣。

「それは我々英國民への侮辱ですか？」

「ち、違うわよ。祖国を馬鹿にしてごめんな……って、あんた生粋の日本人じゃないの！」

「私の祖母の友人が英國人なのです」

「へえ、そういう関係……って、やっぱり生粋の日本人じゃないの

！」

結衣が勢いを削がれて座る。

「もう、樋田はああ言えばこう言つて…」

「科学者とはそういうのです」

市街地のホテルにある料亭の一室に、似つかわしくない二人の客。結衣と樋田は、そこで昼食を食べながら、一休みしていた。

今日は朝から市役所や郷土資料館や図書館などを廻り、不老不死に関する情報を探して回った。

「しかし、こうも資料が乏しいところも珍しいですね。少なくとも噂になれば、それなりの記述が残つても良さそうなものを」

「それは逆に眞実に近いって事じやないのかって思うのよ」

「まあ、言いたいことは分かります。権力者は眞実こそ隠したがりますからね」

「そうよ！ ここに残る史実としては、昔この地に風樓神社という神社があつて、そこに不老不死の生き神を奉つっていた。でも、それが不老不死だと周りに広がつて、幕府や大陸からもそれを欲しがる輩が現れて、風樓神社は何者かに壊滅させられた、という事」

結衣が鮎の小骨を取りながら話す。

「でもね、いくら風樓家が壊滅したとしても、その神が不老不死なら生き残つてゐるはずよね？ それがそこで史実から消えている。幕府とか大陸にさらわれたという可能性も、もちろんあるんだけど。だとしたら、これだけ情報がないのは怪しいのよね。地域の生き神がいる神社が潰され、生き神が行方不明。これって歴史的大事件だと思うわ。なのにほとんどその形跡が残つてない」

「ふむ。それが出来るのは、領主、もしくは幕府ですか」

「幕府がいくらそれを強制したところで、藩主がそれに乗り気でないなら書物の一冊二冊、隠しておくことくらい出来たはずよ。幕府が領主に圧力をかけられるなら、そもそも最初から領主に引き渡せと命じればいいだけで、神社を壊滅させるなんて強攻策を取る必要がないわ」

鮎の小骨が取れないまま、諦めて話に熱中したふりをする結衣。

「領主が、その事実を強制的に消した理由は色々考えられるわね。生き神という嘘で人心を支配してきたので、殺戮されたのがばれるのを隠したか、もしくは、生き神を外敵から保護するために、存在する事実自体を消し去ろうとしたか」

「ふむ。つまり、領主が意図して隠したと。所長は歴史学者にでもなつたらどうですか」

「歴史に興味があるわけじゃないわよ。ていうか、ここに来て茶化

すなつ！」

樋田は綺麗に骨だけ残した鮎をつつきながら、いつものように平然と結衣を見返す。

「で、所長は生き神がいたと踏んだのですか。おそらく、市役所辺りで、でしようかね？」

「そうよ、あの市役所の職員の態度。あからさまに怪しかったのよね。私たちは不老不死の人間を探して、なんて馬鹿正直に言わずには、各地の不老不死伝説を研究しているって言つただけなのに、何故だかそんなものはありません、の一点張り。歴史的に少ないけど資料があるので。普通なら資料館を紹介するとかその程度はしそうなもんでしょう？」

「くそ生意氣そうなガキにわけの分からぬ事を聞かれたからイラッと来たんぢやないですか？」

「誰の事よ！」

「誰の事だと思いますか？」

「……樋田」

「惜しい」

「どうでもいいわよそんな事。それよりも」

「正解は所長でした」

「だから、言わなくてもいいわよー！」

「ばんばん」と結衣が机を叩く。

その手の先で鮎の乗った皿に手が当たつてしまい、結衣の食べかけの鮎がふわり、と宙を舞う。

「あつ、あつ！」

慌てる結衣をよそに、樋田が自分の箸でその鮎を受け止め、そのまま結衣の口に突っ込む。

「むぐつ！ むぐぐううつ！」

魚をくわえた状態の結衣は、抗議しようにも、口が開けない。

「ま、所長がそう言つのでしたらもう少し調査しましょうか。神社についてならもう少し資料もありそうですし

「むぐ」

「下ろせばいいものを口にくわえたままの状態の結衣。

「ところで、所長は不老不死の人を見つけてどうするつもりなので

すか？」

「むぐ？」

「いえ、だから万一所長の滑稽な妄想が現実だつたとして「

「むぐむぐう！」

何か怒つている結衣だが、いつも以上に樋田には通用しない。

「その人をどうするつもりなのですか？」

「むぐ」

「むぐでは分かりません。もっと人間らしい事言つてください」「

「むぐうー」

結衣は唇を動かして鮎を口の中に押し込んでいく。

そして、そのまま鮎をバリバリと尾頭骨付きで食べ始めた。

「あなたは猫ですか」

「だから、見つけたら、当然」

「そんなことより、これから語尾ににやんとつけてください」「にやん？だから、見つけたら当然研究するにやん！」

案外素直な結衣が、語尾ににやんとつける。

「研究と言つても、不老不死なら生きている対象ですよ？ どうに何を研究するのですか？」

「私たちの得意分野から行けばまずは細胞を採集して普通の人間との差異を研究するにやん。あと、アポトーシスの観点から、細胞の入れ替わりのパターンを見てみるにやん

「そんなに簡単に協力してくれますかね？」

「協力させるのにやん！ どんな手を使つても……にやん

結衣は悪そくに笑うが、その口調に幼くて可愛い顔の彼女は、どう見て悪役面は出来ていなかつた。

「最後のにやんは後でとつてつけましたね」

「ちょ、ちょっと忘れただけにやん……つて、どうして私がにやん

とかつけなきやならないのよ！

「自分でノリノリで付けはじめたんじゃないですか」

「……そうだったつけ？」

「全く、自分で言い出したことで怒るなんて」

「ごめんなさい……あれ？ 何か違つ氣がする？」

結衣が首を四十五度に傾ける。

彼女のツインテールがアンバランスに垂れ下がる。

「そんな事どうでもいいじゃないですか。それよりも不老不死の方が大切でしょ？」

「うん、そうだけど」

結衣は納得いかなそうな表情をするが、樋田はそれに構わない。

「じゃ、そろそろ行きますか。食べ終わつた事ですし」

樋田がゆつくりと立ち上がる。

「待つて！ デザートがまだ来てないわよ！ 今日のデザートは季節のスイーツなのよ！」

「そんなものに興味はありません。行きましょ？」

樋田は結衣の手を引く。

「行かない！ やだつ！」

結衣が座り込む。

「駄々をこねないでください。面倒です」

樋田は結衣を抱えてでも運ぼうとした。

「いいいいやあああああつー」

結衣は全身で暴れて抵抗する。

「デザート食べなかつたら、午後ずっと駄々をこね続けるわよ！」

「厄介にも程があります。何のためにここここと思つてゐんのですか」

「樋田が季節の魚を食べたいと言つたからー！ 樋田だけするー！」

所長の威厳どころか、十七歳としてどうかといつレベルで言い返す結衣。

樋田は深いため息をつく。

「まあ、分かりましたよ。食べたりもつ黙々を「ねませんね？」今
田一田へりー」

「うん！」

結衣は嬉しそうに答える。

樋田はやれやれと席に戻った。

「まさか、こんなにも早くばれるとはなあ……」

親父が苦笑する。

俺はその顔にイライラしていた。

急いでいるときほど時間の経つのは遅く、午後の授業はとても長く感じたがそれでもやっと終わりが来た。

俺は友達の誘いを無視して、ダッシュで家まで帰ってきた。

そして、カバンもそのままに親父のいる居間のドアを開けたのだ。そこには何故か既に伏がいた。

着替えまで済ませてるって事は一限早く終わつたのだろう。

で、事情を全て伏から聞いたであろう親父が、俺が何かを聞く前にそう言つたのだ。

俺がイライラするのも分かるだろ？

「で、あんたも知つてるなら話せよ。伏は何者なんだ？」

「お前の妹だ。戸籍もある」

親父が真顔のままそう言つたので、俺のイライラは頂点に達した。「ふざけんなよ。包丁で刺しても死なないような血が俺にも入つてるつて言つのかよ？」

「いや、入つてないな」

冷静に答える親父に腹が立つが、ここで暴れると何も聞けないのでこらえる。

「だから、何者なんだよ、伏は！」

びくん、と伏が驚く。

「いつには悪いとは思つが、俺の経験上、親父はこつまで言わないと駄目だ。

「分かった。答えようか。だが、まず最初に約束してくれ。この話は、絶対に誰にも言わないでくれ。これは私やお前だけの話ではないのだ」

親父のあまりに真剣な表情。

「……分かった」

俺はそれに飲まれつつも、そう答えた。

事実が分かればそれでいいし、元々隠し事を人に喋る趣味もない。「言わなかつたのは悪かつたな。最初に言つてもどうせ信じてもらえないと思つたからだが」

「そうか。まあ、それはいいや」

どんな秘密かは分からぬが、確かに伏は刺されても死なないんだ、とか言われてもまず信じなかつただろう。

親父は立ち上がり、伏の肩を叩く。

「この子はな、不老不死なんだ」

親父は少し微笑んで、伏は少しうつむいて、俺の反応をうかがう。だから、俺はすぐには何の反応も出来なかつた。

「……そうかよ」

そう、ほぼ無表情で言つただけだ。まあ、ある程度は予想できた事だ。

もちろん、刺した一件がなかつたら信じすらしなかつたが。

「こう見えて既に何千年も生きている。死ぬ事はないし、死ぬ事は出来ない」

伏はじつと俺の様子をうかがつてゐる。

俺は驚くことすらためらつた。

「生き神様と言われていた頃もあるが、今ではその信仰はない。だが、我々風楼家は、代々この子を世話し、世間から隠すという使命を仰せつかつてゐるんだ」

不老不死の生き神様。

それを代々守っているのが風楼家。

つてことは、俺も守るって事なのかよ？

「彼女はほんどの時を屋敷にこもって暮らして来ていたんだ。それは風楼家が自らの使命を果たすにはとても都合がいい手段だと思うんだが、よく言つても幽閉なんだ。私もそれを知りつつ彼女を隠していたんだが、可哀想に思えてな。十五年前、戸籍を提出してこの日を待つたんだ」

静かに、穏やかに、親父が言つ。

「……つまり、戸籍も十五年前にダニーで出して、それが通用する歳になつたから出てきたって事だな？」

「いやまあ、それはそうなんだが、それだけじゃ、いくらなんでも小中行つてない時点でおかしいと思われるだろ？ その辺は市とうまくやつてている。と言つた、今は市が我々にこの使命を託しているんだぞ。昔は領主だつたらしいがな」

「なんだかよく分からんが、つまり市も結託してるんだな？」

「ああ、この事実は市役所でも一部の者しか知らないがな。補助金も出てるんだぞ」

「何の名目で出てるんだろうな、それ。

「ああ、だからあんた二ートでも生活出来てるのか」

俺の長年の疑問が解けた。

俺が生まれたときから親父は二ートだし、母さんは専業主婦だった。

それが普通だったので何の疑問にも思わなかつたが、学校に行つて友達と話をすると、それがおかしいという事には気づいていた。うちはどこから収入を得ているのか？ と。

だが、親父も母さんもはぐらかせて教えてくれなかつた。

大方、遺産か何かあつてそれで生活しているんだなと思つていたんだがそつじやなかつたようだ。

「そうだ。だからお前も頑張つて就職しなくてもいいんだぞ？」

「いや、俺は働く気だがな」

「何故だ？一緒にノンタックスペイサーにならひじやないか！」

「何だそれ」

「所得税を払わない消費者」「なるかっ！納税者に謝れ！」

「なるかっ！納税者に謝れ！」

親父がいつもの調子になつたので、俺もいつものように怒鳴つた。その間で、伏が心細そうに俺たちを見上げていた。

「あー、悪いな伏。俺たちは深刻さの足りない家系だからさ、なんかもう、それでいいや」

「それでいいって……？」

恐る恐る、といった表情で伏が聞く。

「まあ、お前は俺の妹だし、俺の家族だ。お前を守るのが使命なら守つてやる。それでいいんだろ？」

深刻さとか真剣さのかけらもない。

降つて湧いた信じられない話。

一族の使命だとか、俺の役割だとか、そんなものを聞かされたわけだけどさ。

重い話に重い使命なんだらうけど、それを受け入れる」とに身構える必要なんてない。

「本当に？」

「ああ、本当に。」これからも俺をお兄ちゃんと呼べ

「お兄ちゃん！」

伏は嬉しそうに俺に飛びついた。

柔らかい感触と女の子の匂い。

「ははははははは

妹と決めた、でも妹じゃない女の子の抱きつきに、俺はただ乾いた笑いしか出なかつた。

長かつた一日がやつと終わり、寝る時間が来た。

今日は色々あつたな、などと思い出すまでもなく、色々な出来事が思い返される。

まあ、一言でまとめれば、俺の妹は不老不死で、俺が妹を守つて
いくつて事でいいのかな。

あの後親父に厳命されたのは、死なないからといって、わざと伏
を傷つけたり、殺そうとしたりするなつて事だ。

死なないといつても痛みはあるから、死なない分、治るまで激痛
と戦わなければならない。

まあ、それは確かに分かる。

刺されたら痛いだろうし、實際今田も刺されてしばらくは痛みで
声も出せなかつたしな。

それにどこで誰が見ていて、ばれないとも限らない。

昨日今日じゃない、何百年何千年守り通してきた秘密を、俺の代
でばらすわけには行かない。

軽いノリで受けた事だが、そこだけはしつかり守ろつと思つ。
そう思いつつ、俺はベッドに入り、電気を消す。

明日も伏と学校へ行くんだな、なんて思つと、少しだけ嬉しかつ
た。

「お兄ちゃん？ もう寝た？」

かちやり、ヒドアが開き、その向こいつから小さな声で伏が俺を呼
ぶ。

「起きてるけどさ、また一緒に寝」

俺が言い終わる前に、伏は俺のベッドに潜り込んで来た。

「えへへ、来ちゃつた」

風呂上りの伏はシャンプーとか石鹼の香りが漂う。

「来ちゃつた、じゃない！ 帰れ、今日からはもう帰れ！」

こいつは俺とは血のつながつていない女の子だ。

妹だけど、そういう関係になることに止め処はない。

そんな女の子と、一緒に寝るつて事は、ビにも歯止めのかけよ
うがない。

「どうして？ 妹なのに？」

「普通の兄妹は高校生にもなつて一緒に寝ない！」

「別に普通じゃなくていいよ?」

「レツツ普通!」

俺は伏を追い出そうとするが、また変なところを触らないようこ、元の位置に頭を押し出そうと思うが、伏はくると首を回し迫つてくる。

肩や手ならいいんだろうけど、触ろうとして変なところに触る可能性があるため、慎重に掻むしかない。

ああ、こいつは何でこんなにいい匂いするんだよー！

誘惑に負けそうじゃないか！

「えへへへ。お兄ちゃんのマウントポジション取ーった！」

気がつくと俺は、伏に馬乗りにされていた。

尻とか股間とかが俺の腹に密着して大変な状態ですよ？

「ノーモア普通！」

そう言いながら、伏はそのまま倒れこみ、俺にしがみ付く。

「ぶるああああああー！」

伏の足から太ももから股間から腹から胸から腕から頬までが俺の身体に密着する。

シャンプーの香りだけじゃない、少し動いたからか、伏の汗の匂いまでする。

伏の柔らかい全身と、この匂い。

冷静でいられる青少年がいたらお皿にかかりたい。

「あ、おつきくなってる！」

伏が俺の股間を遠慮なくむんず、とばかりにつかむ。

「フォオオオオオオッ！」

俺は思わず悲鳴を上げる。

「いやつ、これはその、そういうもんなんだよー！」

血がつながってないとはいえ、妹と決めた女の子相手に股間が元気になつた俺は深い自己嫌悪と自己主張の狭間にいた。

「いいんだよ、これが目的なんだから」

伏がにこり、と笑いながら言つ。

「目的って、何だよ？」

「目的って、何だよ？」

俺の股間を握る事とか、俺のマイサンを元気にさせることが目的なわけでもないあう。

「あのね、私は長い間生きてきて、風楼家の人たちに先祖代々守つてもらつて来たの。それは嬉しいことだし、本当にありがたいと思っているんだ」

伏は、最上級の笑顔を俺に向ける。

俺の股間を握つたままで。

「でもね、そうやつて仲良くなつた人も、みんな死んじやうんだ。仕方がないことだけ、寿命つてものがあつて、その時が来ればみんな死んじやうの」

今度は一転して、悲しそうな寂しそうな表情になる。

俺の股間は、まだ握つたままだ。

「それでね、いい事を思いついたの。風楼家の男の子と一緒にになって、私が風楼家の赤ちゃんを産むの。それでね、その子に守つてもらつて。その子が死んでも私の孫が、孫が死んでもひ孫が、私を守つてくれるの！」

伏は凄い名案とばかりに熱く語る。

「素敵だと思わない？ 私は私の子孫をずっと見続けていられるのよ！」

興奮で股間を握る手が強弱するのが気が気でならないが、伏の言いたい事は分かつた。

だが、いきなりそんな事を言われても困る。

いや、伏は可愛い子だし、付き合つたり結婚したりする事に問題があるかといえば、まあ、ない。

だが、いきなりここで今から子供を作りたいと言われれば、そりやあドン引きものだよな。

「いや、伏、物事には順序つてものがあつてだな」

「上の口ではそんなこと言つても、下の……えつと、鼻は正直だよ？」いやらしいお兄ちゃん

伏は、元気過ぎるマイサンを、親指でいじくる。

「こんな状況で口うならない方がおかしいんだよ！ 男ってそんな

動物なんだよ！」

「いいよ、お兄ちゃんだから許してあ、げ、る」

伏がもう一方の手で、俺の鼻をつつく。

「その代わり頂戴ね」

「……何をだよ」

「こ、だ、ね」

「ノオオオオオッ！」

「動かないで！ 動くと潰すわよ！」

伏が股間を強めに握る。

俺は全ての動きを止めた。

それを潰されると、俺はもう生きていけない。

少なくとも男として死んでしまつ。

「やめろ、伏！」

「やめろ？ あれ？ お兄ちゃん、自分の立場分かつてるのかなあ

？」

「やめてくださいっ！」

俺は恥も外聞もなく言われたとおりに従つた。

「何で親父の代にしなかつたんだよ」

伏が不老不死なら当然親父の若い頃にも出会つていいわけで。

その時にやつてくれていたら、俺も半分くらい不老の血が入つたかもしれない。

「勝徳さんにもね、やつたんだよ？ でも、あの人ガードが超固くて。しかもいきなり結婚するし！」

「ああ、結婚したら手を出さないのか。

そういう律儀さというか真面目さはあるんだな。

「……あの、泥棒猫」

さつきまでは全く違う声で、伏は物騒に呟いた。

「その猫って俺の母さんの事か！？ 母さんは優しいからそつとしちゃってやつてくれ……ください！」

「ふーん、そう言えればあんたにもあの女の血が流れてたわよねえ」
俺の目を睨みつけながら、股間をにぎにぎと揉みはじめる伏。
さつきまでとは雰囲気も変わってる。

やばい、俺、狩られる。

「ま、過去の話はいつか。お義母さんだしね」

いや、確かに伏は俺の義妹で、母さんは義母だけど…

「勝徳さんに振られて十数年。私はお兄ちゃんから子種をもらひつた
め、あらゆる作戦を立てたのよ。もう、作戦は遂行中よつ…」

にやり、と笑う伏。

「いや、よく考えたら、潰したら一番困るのは伏じゃないか?」「

俺も困るけどさ、何より俺の子種が欲しい伏も困るだろ?」

「それなら仕方がないから、お兄ちゃんの子供にアタックするまで
の話だよ…」

「いや、潰されたら子供作れないし」

「……っ！」

伏はそれに初めて気づいたようで、驚いた顔をしていた。

「よ、養子を取ればいいじゃない!」

「俺の股間潰す奴のために、誰がそこまでするか!」

「くづつ…でも! 潰すからつ! 動いたら潰す…」

開き直つた。

これじゃあ俺も動きようがない。

「とにかく、落ち着こう、な? 冷静になつて考えてみよつ。大人
になつてからでもいいんじゃないのか?」

俺はとりあえずこの場を逃れるために伏の説得をする。

このまま妹に無理やり犯される初めてつて十字架を一生背負わなければならぬのは嫌だ。

「私は成長しないもん。それに、お兄ちゃんだけ成長したら、私の
事、子ども扱いするようになるもん!」

「いや、なんで中途半端な年齢で止まつてるんだよ。せめて精神だけでも成長しろよ」

「昔はこの歳が結婚適齢期だつたの！」

「うん、見た目については分かつたけど、精神的にはもつといひ、千年生きた威厳みたいなものを見せてくれないと！」

「さあ、そろそろ観念して。天井の模様数えてる間に終わるから」「嫌だ！ そんな女の子みたいな初体験嫌だあああああつ！」

抵抗しようにも、人質に取られたマイサンがいるので動けない。

「ふふふ、諦めておとなしくなつてね、お兄ちゃん」

「くつ……」

もう、駄目なのか。

このままやられてしまつのか？

この歳でお父さんは辛い。

永遠に可愛い嫁と暮らすのは悪くないけど、俺もまだ色々したいことがある。

「ちょっと待つてね……あれ？ んしょ……」

俺がほぼ観念していると、伏が何だかもぞもぞしている。

その度に俺の股間もぞもぞとなり、なんていうか、変な気分になるんだけれど。

伏を見ると、どうもパンツを下ろすの一苦労しているようだ。片手、しかも利き手で俺の股間を掘んでるから、もう一方の手一本で下ろす事になる。

膝までは簡単だが、そこからが難しい。

立ち上がるなら、俺の股間から手を離さなければならない。

伏はあつちに行つたりこつちに行つたりしつつ、一生懸命脱げりとする。

俺は、伏の白い尻があつちに振られたりこつちに振られたりするのをただ、見ているしかなかつた。

見ているしかない、というのはあくまで俺の話で、俺のマイサンはその様子を見て大暴れしていたわけだ。

伏の尻は、身体全体の線が細いので決して安産型ではないが、形が綺麗で、見ているだけでかぶりつきたくなるようないい尻だ。

そんなもんが目の前で動いているんだから、無感動無関心でいる
れるほど達観した聖人にはなれない。

完全体になつたマイサンは伏の手を押しのけるため、伏はマイサンのみを握つていた。

これで少なくとも、ギョクを潰される心配はなくなつた。

今のマイサンなら、多少の攻撃には耐えうるだろ？ 何故なら、
完全体だからだ。

「よし、脱げたつ！ じゃあ行くわよ、お兄ちゃん……きやああつ！」

？

一瞬の隙を突いて俺は、伏の腕を引っ張り、倒した上に乗り、伏の肩をベッドに押し付けた。

それでも伏はマイサンから手を離さなかつたが、俺が振り解く要領で股間をひねつたら、あえなく手を離した。

「な、なによお兄ちゃん。私と一つになるのがそんなに嫌なの！？」

悔しさに泣きそうな表情で伏が訴える。

ああ、これが敗者の表情か。

俺は余裕を持つて組み敷いた伏を、上から眺めていた。

「まだ、やりたいことがあるんでな」

俺が格好つけてそう言つた。

「やりたいことってどうせ女遊びでしょうが！ そんなものしなくつたつて私がずっと相手してあげるから！」

格好つけた俺の言葉に泥を擦り付ける伏。

女遊びって言わると、間違つちやいにいけど、ちょっと違つ気もしないでもない。

「いや、それだけじゃないからさ。もつとこつ、恋愛とか結婚とか家庭を持つたりとか、そういう事を普通にしたいんだよ」

「結局女遊びでしようが！ そんなの全部私がさせてあげるわよ！ いや、何ていうか、そつじゃないって言つか、そつなんだけどさー、出会いとかわくわくとか、そういう希望みたいなものが欲しいんだよ。

「別に伏が嫌つてわけじゃない。俺はさ、もう少し希望みたいなものが欲しいんだよ」

「希望が欲しいなら私がいくらでもあげる！　希望でも恋でも肉体でも何でもあげる！　だから私にしてっ！」

伏が俺の下でばたばたともがく。

駄目だ、このままじゃ埒があかない。

「おーい、うるさいぞ、もう少し静かに！」

いきなり俺の部屋に入つて来たのは親父だが、俺たちの様子に言葉を止める。

俺は自分の格好をふと思い返す。

俺はマイサンを極限まで大きくさせて、伏を組み敷いている。下半身裸の伏が、俺の下でもがいでいる。

「あー……」

「いやっ！　違うから！　俺が襲つてんじゃなく、俺が！」

俺が慌てて親父に弁解をしようとして、肩を上げてしまつた。解放された伏は、俺から逃げ。

「お兄ちゃんの馬鹿あああっ！」

俺の股間を思いつきり叩いて叫ぶ。

「ぎやあああああっ！」

その地獄の苦しみに俺がもがき苦しんでいると、親父が一言言つた。

「……邪魔したかな？」

「邪魔じゃねえっ！　むしろベストタイミングだつたけどっ！　それはそうと息子が息子を殴られた姿をこれ以上見ないでっ！」

「ああ、じゃ、また明日」

「あ、伏連れ帰つてくれ！」

俺が転げまわつてている間に、また一人きりにされたら、今度こそもう終わりだ。

「伏なら部屋に帰つたよ。今日はもう来ないんじゃないかな？」

ようやく痛みが徐々に引いてきたので、周囲を見回すと、確かに

伏はいなかつた。

俺はほつとしてベッドに寝転がる。

こんな攻防がこれからずっとあるのかと思うと恐ろしい。早いところ諦めて軍門に下つた方がいいのかも知れない。

それで何か失うものがあるのか？

可愛い妹が彼女になり、甘く退廃的な生活が約束されている。

俺は何を恐れている？

何を失うと思っている？

ああ、そうだ。

男の、プライドだ。

女の子に無理矢理初めてを奪われるという事態に抵抗したいだけなのだ。

だつたら、自分から襲えればいいか？

いや、そんな簡単な問題じゃない。

これはもつと根が深い問題だ。

いや、そんなこともないかも知れないが、もつといつ、複雑なのだ。

俺は絶対、伏に貞操を奪われない。

そう誓つて眠りに着いた。

ちなみにマイサンはまだ起きていた。

妹が呪い殺されたけど生き返った。

「おはよー、お兄ちゃんー！」

朝起きて台所へ向かうと、昨日の事など何もなかつたかのよう、元気で、
伏が明るく挨拶をする。

「ああ、おはよー！」

俺は、こちなく挨拶を返す。

「今日も一緒に学校行こうねー！」

ここまで明ること、昨日の事にこだわっている俺の方がおかしい
気がしてきた。

俺はそそくさと朝食を食べる。

俺がここで飯を食べている限り、伏はここにいるだらう。

そして、朝のこの時間は母さんはここにいる。

昨日の話を聞いてから、伏と母さんと一緒にやせるのが怖くて仕
方がない。

あの、吐き捨てる母さんを「泥棒猫」と言いつつ、すぐに言つ
直したが、あの感情は本物だつただろ。

まあ、伏からすれば母さんは親父を横から奪つた泥棒猫なんだ。

今では嫁姑にしか見えないが、それでもその修羅場を俺は見たく
はない。

俺はいつも倍の速度でパンを食べて立ち上がる。

「じゃ、さうそろ行くか！」

いつもよりも早い時間だが、そう伏に言いつつ、俺は部屋に鞄を取り
に戻る。

「うんっー！」

すでに鞄を用意してあつた伏は、玄関へと先に向かう。
伏の待つ玄関へ急ぎ、家を出た。

「行つてきます」

「いってきますーす！」

俺の声に続き、伏が声を上げ俺たちは学校への道を歩き出した。

「……ふつ」

俺は、まずは一安心だった。

女の修羅場つてのがどうにも好きになれない。

俺は小学の時も中学の時も、女の修羅場つてので嫌な思いしてるので嫌な思いしてので

「ねえ、お兄ちゃん？」

自分の腕を俺に絡めながら、伏が言う。

「何だ？ って言つか、離れろよ、変な誤解されるだろ！」

俺が腕を振りほどこうとするが、伏がギュッと強く腕を抱きしめる。

ていうか、胸当たつてる。

振りほどこうすると、胸に肘を押し込まなければならぬので、身動きが取れない。

「じゃあ、誤解じゃなくせばいいんじゃないかな？」

伏がにやり、と笑う。

油断してたな、たすがにここでは仕掛けで来ないと想つてたんだが、まさか、ここで来るとは。

こつして事実上の仲の良さを見せつけて、女を遠ざける作戦だな。そつはさせるかよ！

「あ……拓海……くん……？」

背後から妙に震えた声がする。

ああ、この時間にはこいつが登校してくるんだな。振り返るまでもなく、そこにまは真希がいた。

ああ、既にヤミモードだ。

「おはよみづやこまます、真希先輩つー。」

そんな空氣を読んでいるのかいないのか、伏が明るく挨拶をする。

「そんな……妹だと思って安心してたのに……」

狼狽とヤミ化で震える真希の手には、五寸の釘。

「いや、まあ、落ち着け、真希。これはな……」

真希に事情をどう説明しようかと考える。

いや、待てよ？ 説明する必要あるか？

真希は普通にしてれば可愛いしヤミ化しなければ性格も悪くないが、あのヤミだけは厄介だ。

「いつのせいで他の女の子が寄つて来ないつて事もあるからな、もしかすると、そのまま黙つてた方が離れてくれるもんかな？」

「ひどい……恥ましい……憎い……」

ぽろぽろと大粒の涙を流す真希。

「あ、いや、真希？」

残念ながら、俺は女の涙を前に非情には慣れない甘い男だ。

「伏、そろそろ離れるよ、誤解されるだろ？」

俺は伏の腕を振りほどくといつて、胸に肘を押し込む。肘に柔らかな感触を感じる。

ああ、くそつ！

伏の身体が病み付きになつたらどうするんだよー。それがこいつの狙いだろ？ なぜー。

「きやつ」

短い悲鳴と共に、伏が俺の腕を離す。

「まったく……いくら兄妹って言つても、限界があるんだよ。ふつうこんなに仲良くないんだならなー！」

「あ……伏ちゃんは、ずっと離れ離れだつたから、寂しかったのかな？」

徐々にヤミモードから戻つていぐ真希が笑顔で言つ。

「まあ、そんなところだ」

ふう、何とか落ち着いたか。

本当は伏を利用して、徐々に真希から遠ざかりたかったがな。ま、真希とはいえ女の子に泣かれるよりはマシだ。

「昨日の夜はベッドでお兄ちゃんに押し倒されたけどね～」

そんな瞬間、伏のファッキンジャップがそんな爆弾を投下しやがつた。

「あの時私、下半身何か履いてたつけなんがんなんっ！」
俺は慌てて伏の口をふさぐ。

「伏は病氣で幻想を見ることがつ！」

俺は慌てて取り繕おうと真希を見るが、その表情はバリバリのヤミモードだった。

「恨苦滅妬怨嫉殺呪死憎……」

何言つてるのかわからないが、とにかく呪いたいってのだけは分かる！

「落ち着け、真希！」

真希は俺のわきをすり抜けると、

伏の田の前へ。

「や……め……つ！」

ぶちっ

「痛つ！？」

真希は、伏のセミロングから髪の毛を一本抜くと、そのまま走つて行つてしまつた。

「……なんなんだ、あれ？」

足の遅い真希の後姿を見つめつつ、俺は啞然としつつそう言つた。
「ま、あれで諦めてくれるほどあつさりとした人じゃないけどね」
少しだけ、勝ち誇つた表情の伏に、少しだけイライラした。

「ふつ……」

風呂から上がり、部屋に戻る。

朝、あんなことがあって、その後学校で真希を見かけなかつた。
どこへ行つたかも分からぬが、会つたときに登校中だつたことを考へると、あの事が原因だつたのだろう。

そう考へると罪悪感も大いに湧いてくる。
いや、確かに悪いのは伏だ。

伏があそこまで真希を傷つけてしまったのは事実。だが、俺も一瞬はあいつを遠ざけるために伏を利用しようとしたのだ。

つまりは俺も同罪だ。

「明日、謝らないとなあ……」

いや、しかし、何を謝るんだろうな、俺。

俺が悪いなんてあいつは思ってないだろうしな。

伏が全面的に悪いと思つて恨んでるだろうから、伏のフォローバーをしてやるのが一番かな。

まあ、そうしてやるのが兄としても、真希の友達としてもいいんだろうな。

じゃ、そうするとして、今日はもう寝るか……。

俺は、電気を消して、ベッドにじろりん、と寝転がる。

「つ！」

見上げた天井に、伏が張り付いていた。

「ななな、なん……」

なんだお前は、などと言おうとしていたその瞬間、俺の上に落ちてくる。

「ぐふつ……」

俺は伏を鳩尾で受け止めたため、動きが止まる。

「さあつ！ 速攻でイッてもらうわよ！」

伏は動けない俺のズボンを下し、更に自分のパジャマのズボンとパンツも下す。

そのまま俺にまたがつて股間の上に乗りこむ。

動きが取れるようになつた俺だが、この瞬間には間に合わない。まずい、やられる！

そう思つた瞬間だつた。

「ぐつ！」

伏が胸を押さえる。

「ぐ、ぐ、苦し……」

もがきながら、その場に座り込む。

いつもの演技でもなくマジものだ、これ。

本気で苦しがってる。

「お、おい、大丈夫か！？」

伏が座り込んだのは俺の腹の上で、俺は起き上がれないので、手を差し伸べて、伏を俺の上へ寝かせる。

俺の腹には伏の股間が直に当たっているのだが、今はそれビショビショない。

「あ……あ……あの女……本物だったとは……」

俺が頭や背中を撫でてやるが、伏はもがき苦しんだままだ。

「あの女って誰だ？」

「ま……真希つてあの女狐が……」

そこまで言つと、伏はこと切れた。

「え？ 伏？ おい、伏！？」

俺は伏を揺さぶる。

なんなんだこれは！

何が起こってるんだよ！

俺はベッドに伏を寝かせる。

まさか、死んだのか？

俺は、伏の胸の下に耳をつけてみる。心音がしない。

何でだよ！

不老不死じやなかつたのかよ！

「伏つ！」

俺はもつと強く胸を押し付け、心音を探す。

伏は寝るときブラジャーをしていないので柔らかな胸の感触がそのまま伝わってくるが、今はそれどころじゃない。

俺は伏の胸の周りに耳を押し付けて聞いて回った。

ん？

とくん、とくん

動き出した？

生き返ったのか？

なんだか分からぬけど生き返ったみたいだ！

「……お兄ちゃん……激しい……」

伏の胸に顔を埋めていた俺の耳に、切ない声が響いてきた。伏は下半身半脱ぎ状態で、上半身も俺がまさぐっていたため、全身で乱れていた。

「いやつ！ これは、お前がつ！」

俺は慌てて離れる。

伏はそのまままた襲いかかってくると思つたが、苦笑しながら服を整えた。

「はあ、なんか今日は邪魔が入ったからもういいや。それよりもお兄ちゃん、あの真希つてやつには注意して。あいつ本物の呪術師みたいだから」

「呪術師……？ なんだそれ」

「まあ、人を呪つて殺したり、怪我させたりする危険な奴だよ。偽物だと高をくくつてたら、さつき一度呪い殺されたから」

伏は平然と言うが、いや、ちょっと待て。

真希が呪術師？

確かにいつも藁人形とか五寸釘とか持つてゐるけど…

しかも今殺されたって！？

え？ あいつ、伏が不死じゃなかつたら、本氣で殺してたつてこと？

そんなやばい奴なの、あいつ？

いや、いきなり呪術師つて言われてもピンとこないけどさ、まあ、

不老不死がいるくらいだから、そういうのもこるかもしないけど
やー。

よりもよつて真希が？

俺、あいつと結構付き合い長いぞ？
確かに変な奴だけど、そんな恐ろしい術持つてるような奴には見えないぞ？

いや、確かに呪術師ってだけで人を嫌うのは違うと思ひナビ、現に伏を殺そうとしたしな。

「ま、注意してね、私は殺しても死なないからいいけど、お兄ちゃんはすぐに死ぬし、機能を停止させられることがあるから」

そう言いながら、伏は部屋から出て行つた。

機能停止つてどこの！？

まったく、不老不死に、呪術師か。

俺は何でこう、普通でない女の子ばかりに好かれるんだろうな。

翌日、何事もなかつたかのような朝食は、まあ、何事もなかつたので省略して、何事もなく伏と学校へ向かつたわけだが。通学中も何事もなく、とは行かなかつた。

「あれ……？ そんな……どうして……！」

物陰から、心底驚いた表情で俺たち、といつか伏を見つめる声。

「…………真希、おはよつ

まあ、真希の正体を知つてしまつたわけだが、それだけで俺の方から態度を変えるのもどつかと思い、一応は普段通りに挨拶をしてみた。

「おはよつざいます、真希先輩」「

伏も、満面の笑みを向ける。

真希はわけがわからず呆然としている。

まあ、呪い殺したはずの伏がぴんぴんしてるわけだから驚くだろ

うな。

「ど、どひして……？ 私は、絶対確実に……」

呆然といふか狼狽しているようだ。

つるたえる真希はそれで可愛いが、まあ、人をリアルに呪い殺すような奴だから、可愛いよりも厄介が上回る。

「先輩」

伏は笑顔のまま、一步前に出る。

真希は慌てて一步下がる。

「呪いは本人に倍返し、でしたつけ？」

伏は悪魔か何かかと思うくらいのすげえいい笑顔で、そんなことをのたまつた。

真希はといふと、伏の言葉に手足を極限まで震わせ、恐怖に泣きそうな顔をして、そのままその場に座り込んだ。

まあ、そのまま逃げてしまいたいんだろうけど、手足が言ひつけられ利かないんだろう。

足元に見えるスカートからはブルーのパンツが見えているが、もはや隠そうともしない。

ま、ここは俺たちが去るのが紳士的つもんだろ？

「伏、じゃ、行く」

俺は学校へ向かうようへと促そうとしたとき、伏は、ててて、と真希のもとへと小走りで向かう。

「…………」

ここからじや何言つてるか聞き取れないが、小声で何かを真希に言つ。

真希の顔はすでに狼狽していたが、更に恐怖にゆがんだ。

ジヨオオオオ……

なんだか、水音が聞こえ、真希の周りに水たまりが出来る。つて、漏らしてんじやないか！

伏はなんて言つたんだよ！

「じゃ、行こうか、お兄ちゃん」

伏は生き生きとした笑顔で、俺の手を引っ張る。

俺は真希も気がかりだったが、俺に残されると真希も恥ずかしいだろうと思い、伏に引っ張られるがままに、学校へと向かった。

「お、おい、真希になんて言つたんだよ」

「秘密」

明るくやう言つて、そのまま俺の手を引いたまま走り出したので、俺も走り出した。

真希はさすがに一日連続の欠席はまずいと思つたのか、遅刻気味で登校してきた。

まあ、そつとしておこつかとも思つたが、後味が悪いので話しかけることにした。

いつも暗めな奴だが、今日は九十度くらいうつむき、下を見ていたのでまた、話かけづらい。

「あ、なあ、真希」

俺が声をかけると、真希はゆっくり上を向く。

「…………」

俺を見ているのか、虚を見ているのか分からぬよつた視線を、一応俺に向けてくる。

「拓海……くん……」

目には泣き腫らした跡があり、目もまだ少し赤い。だが、ヤミモードのそれじゃなかつた。

ヤミモードでなけりやそれなりに話は通じるだろ？

「伏が何て言つたか知らないが、気にするな。あいつはちょっと特殊な人生を送つてきたから、世の中のことよく知らないだけだから

さ」

伏に何を言われたか知らない以上、俺はそんな曖昧なことしか言えないが、とにかく励ましてみようと試みた。

「拓海くんは、こんな私にも優しくしてくれるの……？」

「いじらしく、そんなことを言つ真希はとても可愛い。」

「まあ、お前とは昨日今日の付き合いじゃないだろ？　お前が悲しんでりや、励ましたいとも思つた」

俺は真希の頭をぽん、と撫でるように叩いてやる。

真希は俺の触れた場所に手を乗せ、暖かそうに撫でる。

「……拓海くんの妹さんにひどいことをして、拓海くんの前でお漏らししたのに？」

恥ずかしそうな、泣き出しそうな表情で真希は核心を突く事を口にする。

さあて、ここは難しい問題だぞ。

気にしないと言つと、これからもガンガン伏を呪つてくるだろ。まあ、伏は死なないから殺しにかられても問題はないが、封印とかなんとか、他にどんな術を持つてるか分からぬ上に、その攻撃対象が他に向かつた時に恐ろしい。

かと言つて、やめると言つのもそれがどこに向かうか分からぬ。別に呪術師だから真希を嫌うつて事はないし、それだけは伝えておきたい。

さて、何て言つのが一番いいか？

行為を否定しつつも、その立場は否定しない。

なかなか難しいな、これ。

「いや、まあ、あまり褒められた話ぢやないと思つて、やめた方がいいとと思うけど……」

そう切り出すと、真希の顔が曇り始める。

「べ、別にそれが駄目つてわけぢやないぞ？　少なくとも俺はそういう真希もいいと思つてる。そういうさ、人の出来ないことをやるつて、まあ、格好いいじやん」

慌てて取り繕つた。

これで何とかバランスが取れたか？

「拓海くん……」

真希はさつきとは違ひ嬉しさの混じる驚きの表情で俺を見つめる。

「私のお漏らしが、そんなによかつたの……？」

「そつちじやねえよ！？」

俺は慌てて否定した。

「でも、さつき格好いいって……」

「それは呪じゆ」

俺は慌てて口閉じた。

俺が真希を呪術師と知つてゐることは黙つておいた方がいいかも知れない。

「その、伏にひどいことしたって言つただろ？ 何か知らないけど、そういうことはやめた方がいいけど、そういうのが全面的に駄目つてわけじやなくて、少なくとも俺は興味があるつていうかさ」
とにかく、伏に危害を加えないことと、でも呪術師を否定してな

いことを呪術師を知らない体で言わなきやならない。

「拓海くんは、ひどいことをされることに興味があるの？ Mなの？」

「ノオオオオオッ！」

どんどんドツボにはまつていく俺。

俺は真希に説明するのに更なる時間を要した。

「はあ……」

俺は思わずため息をつく。

何でいうか、今日は本当に疲れた。

「どうしたの、拓海くん？」

そしてそれは現在進行形だ。

「いや、ただ単に今日は疲れたってだけだ」

俺は返す言葉も適当に真希に返す。

「ふーん、でも昨日はきちんと寝かせてあげたじやない？ ビービー疲れるの？」

俺は伏と真希の二人で帰つている。

分かるだろ？、冷戦どころか開戦してゐる最中の一人を連れて帰る、当事者の俺。

伏もやたら刺激的な事ばかり言い、真希はヤハモードになりかけの状態だ。

なんだろ？、このままじゃまずい。

このまま全面対決になつたら、おそらく俺も巻き込まれる。しかも、ただじゃすまないレベルで巻き込まれる。

何とか話題を変えて、少なくとも今日の対決は避けないと。

「樋田 つー どーに行つたのよ、樋田あああつー」

だが、話題を変えるまでもなく、話題が自ら飛び込んできた。

周囲には俺たちのような下校中の生徒が多い中、似つかわしくないゴスロリの女の子が半泣きで叫んでいる。

見た目から判断して中学生くらいか？ ゴスロリは妙に似合つていて、生意氣そうなその子を可愛く見せていた。

だが、ことん下校風景に似合わない、現実離れしたような子だな。

その女の子は、不安げに辺りをきょろきょろと探しながらふらふらと歩き回つていた。

右に左に首を振るたびにツインテールが揺れる。

「迷子、か？」

俺はとりあえず伏と真希に確かめてみる。

いや、中学生だぞ？

中学生で迷子？ つてのがありえなかつたので、確認を取りたかつたんだが。

「まあ、状況を見る限りそんなんじゃないのかな？」

伏も判断に困る様子で答える。

ま、本人に聞いてみればいいが。

「どうしたんだ？ 迷子か？」

俺は出来る限り優しい声でその子に話しかけてみる。

いきなり年上に話しかけられても怖がるかと思つたからだ。

「ち、違うわよっ！ 橋田が迷子なのよ！」

半泣きの顔を繕いながら、そう主張する女の子。いや、どう見てもこの子の方が迷子に見えるんだけどさ。だが、とにかく微妙な年頃の女の子だし、自尊心を傷つけないようにならないとな。

「そつか、それは大変だな。よかつたらその橋田つてやつを探してやろうか？」

「……ほんと？」

不安げに見上げる瞳が可愛い。

「って、俺は中学生に何ときめいてんだよ！」

「ああ、だからさ、橋田つて奴の特徴を教えてくれ俺は優しく微笑みながらそう言つた。

女の子は、それで安心したのか、少し涙をこぼす。

「うん、あのね、橋田はいつも口では意地悪な事言つナビ、本当はとっても優しいの」

完全に子供口調になつた女の子。

もしや中学生に見えるが小学生なのか？

「……いや、そんな内面的には話されても見つけられないんだが」ともかく、優しいとか言われても探せない。

俺がそう突つ込むと、女の子は不思議そうに俺を見上げて、はつと目を開く。

「ん？ 僕が何かしたか？」

「まさか所長にそんな風に思われて居るとは意外でした」

俺の背後から、聞きなれない声。

振り返ると、長めの髪の美形と言つてもいい優男が立つっていた。誰だこいつ？

「橋田つ！」

女の子がそいつのところに駆け寄る。

「ああ、こいつが橋田か。

「橋田！ どこに行つてたのよ！ 勝手に迷子にならないでよ！」

女の子が樋田に怒る。

樋田つて奴はまあ、俺と同じくひいの歳に見えるし、びいと
も「この子が迷子だったんだろ?」
「迷子になつたのは所長ですが、まあいいでしょ?」僕は本当にと
つても優しいので

「なつ! 何聞いてたのよ!」

女の子の顔が真っ赤になる。

「聞いていたというか、所長の泣き声のする方に来たら、勝手に言
つてただけです」

「泣いてないわよ! 忘れなさいよ全部!」

「あいにく人より多少記憶力がありまして、中々難しいですね
「それ一でーもー忘れなさあああいつ!」

無茶を言つ所長と呼ばれる女の子。

俺ですら呆れるくらいの無茶だが、言われた本人は平然とした態
度で女の子を見返していた。

「……むつ!」

彼は急に深刻な表情になる。

「な、なによ?」

「料亭で季節の魚料理を食べると忘れるような気がします。ええ、
おそらく忘れます」

「脣に食べたじゃないの!」

「何度言わせるんですか、今は鮎の季節にあらず! わけんとした
季節の魚でなければなりません」

よく分からぬが、こいつら脣から鮎食つてたのか?

「本当? じゃ、夜も魚を食べるわよ!」

「料亭ですよ、ここ、重要ですよ」

「分かってるわよ!」

怒鳴る少女。

「……この子、騙されてる……」

真希が呟くような声で言つ。

俺も伏も同じ思いだつたが、割り込める雰囲気でもなかつたので黙つていた。

「それでは皆さん、また機会がありましたらお会いしましょう」

樋田がにこやかに手を振る。

「あ、ああ……」

つられて俺も手を振つた。

一人の姿が、角に消えていく。

「……なんだ、あれ？」

「うーん、お嬢様と執事？」

伏が腕を組んで首を傾げる。

「だけど何か、所長、なんて言つてましたね？」

「じゃ、ショチョウつて名前の子だつたり？」

「そんな名前の女の子は、小六か中一で自殺するだろつな

「普通に考えて、所長つてニシクネームなのかな？」

「そう考えるのが妥当か……」

一人の消えていった方角を眺めながら、その話題で喋つていたら、
いつの間にか家に着いていた。

妹が刺殺されたけど生き返り、変なロリータが絡んできた。

さて、また夜がやつてきた。

これが毎晩続く限り、俺はいつか伏に童貞を奪われるだろう。だが、向こうの技にも限りがある。

一度使った技はもう俺には通用しなくなる。

……かも知れない。

攻防を毎日続ければ、いつか勝利の日が来るかもしれない。かも、知れない。

まあ、伏の技が尽きるか、俺が塞ぎ切るか、というところか。正直に言えば、そこまでの緊張感もない。

いや、初めての相手だし、それが誰とどういう形でって、結構大事なのかもしぬないが、まあ、その相手が伏だったとしても、嫌だという感情はどこにもない。

ただ、妹に無理やりってのが気に食わないだけの話だ。

最初がそうだったとして、その後が何か変わるって話なら別だが。

……いや、待てよ？

もし、初めてを無理やり奪われた場合、その後の主導権をずっと伏に握られてしまわないか？

一度握られたら生涯だ。

それどころか、俺の子供も孫も、延々主導権を握られかねない。俺が初めてを無理やり奪われたことで、これの子孫が代々伏に主導権を握られるかもしぬない！

まずいな、これはまずいな。

一気に緊張してきた。

俺の貞操には、俺の子孫の命運がかかっている……！

つて、あれ？ 俺、もう伏と結婚すること決めてるのか？ いや、そのつもりはない。

決定じゃない、候補の一人では確かにあるけど、伏に決めてるわ

けじやない。

まあ、見た目可愛いし、性格も、時々怖い一面を見せるけど、悪くはない。

今はまだそれだけって事だ。

こいつの人は積み重ねていくもんじゃないのか？

その先に恋愛があつて、結婚があつて。

だから、最初に子作りを持つてくる伏にはついて行けない。

それだけの話だつたはずなんだがな。

いつの間にか俺もあいつに乗せられてたつて事か。

ま、今一度冷静になろう。

そう思いながら、俺は布団に入った。

「ん？」

俺はすぐに違和感を感じた。

布団が妙に暖かい。

いや、それよりも伏のシャンプーの匂いがする。

これは、どういう……いや、考える時間はない、ここは危険だ。

俺はすぐさまベッドを飛び出そうとしたが、布団に忍んでいた魔

物はそれを許してはくれなかつた。

背後から俺の腰に巻きついてきて、ズボンとパンツをずり落とす。

まだだ！

こいつの目的は俺の股間。後ろから抱きつかれたからと黙つても守り切れる！

そう思つた瞬間だつた。

伏の指が、強引に俺のあすぼーにねじ込まれた。

「フオオオオオオオオ！」

俺はその超感覚に悲鳴に近い声を上げた。

「やめつ！ むけつ！ そこはつ！」

俺の言葉など全く無視してぐいぐいと指を押し込んでくる伏。

「ふふふ、かかつたわね、お兄ちゃん」

背後からは勝ち誇つた伏の声。

「伏つ、これはどうしたことだつ！ ふあん！」

正直、あすほーの周りは思つた以上に感じやすい。

一生知りたくはなかつたが、それを知つてしまつた俺は、この状態をあと三十分も続ければ、新しい扉を開いてしまつそうだ。

「ふふふ、お尻の穴に指を入れられると、どんな大男でも、力が出せなくなるのよ。昔格闘家のアントニオさんが、その技で生意氣な新人を懲らしめたこともある有名な技よ」

そのアントニオさんは、あの有名なアントニオさんですかつ！

「私は生意氣なお兄ちゃんを懲らしめればいいんだけどね～」

伏は俺のあすほーの中の指をぐるぐるんと回す。

何か反論でもしたいが、声を出すと、何て言つたか、情けない喘ぎ声を出してしまいそうなので黙つていた。

「さて、じゃあそろそろやつてしまおうか

伏は嬉しそうに俺の上に乗ろうとする。

「……あれ？」

だが、失敗する。

そりやあ、俺の尻に指突つ込んだまま、俺の上に乗るのは中々難しい。

俺の股の間をぐぐつて俺に背を向けるようにして座らなければならぬんだらうが、それでもかなり無理な体勢だ。

「くつ！ このつ！ お兄ちゃん、もつと足開いてつ！」

「無理つ、んふうつ！」

伏が動くので、俺はびくんびくんと感じてるんだが、だんだん女の子の気持ちがわかつて来てどうしようかと思う。

「もうつ！ お兄ちゃんの馬鹿つ！」

思い通りに行かなかつたのでイライラしたのか、伏はそう言つて、指を一気に引き抜いた。

「いくううううううううつ！」

俺はどこかに旅立つた。

伏はそのまま出て行つたので、安心してそのまま意識を落とした。

威厳とかプライドとか言ってたけど、俺はもう十分それを踏みにじられている気がした。

さて、また新しい朝が来た。

希望の朝だ。

喜びに開くものは何もないけど、またあの攻防が繰り広げられるのかと思うと頭も痛い。

昨日はあの迷子の子に会ったおかげで、何事もなかつたが、真希のヤミも頂点に近かつたからな。

呪術師として真希があれで引き下がるとも思えない。

昨日の夜も呪いはなかつたし、今朝にも何らかの攻撃があつてもおかしくない。

昨日かなり伏を恐れてたから、もうあれで終わりならいいんだけど。

真希がそんなに諦めがいいなら、問題はないんだよ。あいつはそんな奴じゃない。

絶対何らかの攻撃を仕掛けてくる。

そう思いながら、若干緊張気味に登校する。

本当は時間ずらして登校したかつたんだが、伏がそれを許さなかつた。

ちなみに今日も腕を組んでの登校だ。

しかも伏は俺の腕に頬擦りするがごとく、くつついてる。

まあ、周囲が見て兄妹には見えないよな、これ。

よく言つて恋人。しかも肉体関係を想像できるような密着度だ。いや、伏に密着されるのが嬉しくないってわけじゃない。

服の上からでも分かる柔らかい体が俺に押し付けられ、甘い匂い

だと、そういうのがあると、まあ、悪くはない。

だけど、俺にも世間体つてものがあるわけだ。

女の子と仲良く腕組んで登校なんて、人に見られたら、どんな噂が立つか分からない。

俺は周囲には真希と仲がよく、もう付き合つたりやえぱ? みたいに感じで見られてるんだよ。

そこをさ、全く見知らぬ女の子と、真希ともやつたことのないような親密ぶりで歩いてたら、そりやあ悪い噂も立つ。それを弁解できる唯一の事は、伏が妹だつてこと。だが、考えてもみよう。

妹とここまで親密に歩いてたらそれはそれで異常だ。実際それで真希は嫉妬して呪い殺したんだからな。

「どうしたの、お兄ちゃん?」

そんな俺の心の葛藤など全く気にもせずに伏が俺を見上げる。あー……、まあ、一番悪いのはこれを突き放せない俺なんだよな、実際。

まあ、夜の攻防を考えると、このへりこじつて事ないと思つてしまつんだよな。

「いや、何でもない」

まあ、少しくらいの噂なら気にしないし、このままで。

突然、俺と伏の前に、一人の女の子が現れた。

それが真希だと分かるのに、数秒はかかつただろうか。

俺と真希は結構仲がいいので、顔が分からぬなんて事は普通ならありえない。

何故分からなかつたのかと言えば、真希のヤミモードが異様だつたからだ。

普段のヤミモードが健全で正常に思えるほど、これはヤバい。爆弾持つて自爆する奴のような、そんな思いつめた顔。

心の底から怯えるような、そんな表情。

可愛いなんて思えない。

これは、美しい、とも言える。

そう、ぞつとするほど美しい顔だ。

「真……希……？」

震えて逃げ出したくなる足を抑えて、俺は声をかける。すると、真希はにやり、と背筋が凍りそうな表情で笑う。俺の血が凍つたんじゃないかと思うくらい寒い。だが、それはほんの一瞬の事だった。

「……え？」

真希がゆらり、と動いたかと思うと、伏に体当たりをした。

「……え？」

体当たり、じゃない。

真希の手には、大きな包丁が握られていた。それを伏のわき腹に刺したんだよ。

俺だけじゃなく、伏も一瞬啞然とする。

そりやそうだ。

どんな要望になつても真希は真希だ。

真希が往来で人を包丁で刺すわけなんかない。

少なくとも、今この瞬間までそう思つていて、今でもそれを信じたくない。

「あんたが悪い！ 拓海くんに近づいて！ 私が長い間ちょっとずつ近づいて来た場所に割り込むから……！」

その声はもう、俺の知る真希の声じゃなかつた。

悪魔が宿つたような声だ。

「あんたを殺して、私も死ぬ……！」

真希は包丁を抜こうとしたが、中々抜けなかつたため、それを伏の腹の中に残し、来た方向とは逆に走り去つて行つた。

俺は呆然とそれを眺めているだけだった。

何が起こつたのかを整理しなけりや優先順位も決められない。

真希が伏を刺した。

あいつは伏を殺して自分も死ぬと言い残して走り去つた。

まづいな、伏は殺しても死なないが、真希は死のうと思つたら死

ぬ。

「おい伏、大丈夫か？」

俺はとりあえず、包丁を刺されて地面に倒れた伏に声をかける。

「…………いたい…………もうちょっと、待つて…………」

苦痛に顔を歪めながら、いつもの元気な声じやなく、小さな声で言ひ。

そうだ、こいつは不死身だが、痛みは感じるんだつた。

それは治るまでの間だが、その間は激痛に耐えなければならない。俺に出来る事はないが、とりあえずてをぎゅつと握つてやり、背中をさすつてやつた。

いや、全く関係ないけど、生理痛に苦しんでる女の子にはそうしてやるといつて言われた事があつてさ、俺も気が動転してたからそりじたんだよ。

「…………ありがと、ちょっと痛くなくなつた…………」

伏がそう言つたのでほつとして続けた。

もうじき待つと、包丁は抜け、伏は元気に立ち上がつた。

「ありがと……！」

そして、俺に抱きついてきた。

「ああいつ時つて本当に痛くて不安になるの。だから優しくしてくれるのが一番なんだよ！」

そうか、俺の生理痛介抱のやり方つてのは間違いでもなかつたつて事か。

「よし、じゃあ、真希を追つぞー！」

「どうして……？」

「あいつ、自殺するつもりだ！ 追いかけて止めないと！」

俺は真希の消えた方向に走つとする。

だが、伏が腕を絡めてきてそれを止める。

「ねえ、あいつは私を二回も殺したんだよ？ 二回とも、本当に痛かつたし、苦しかったんだよ？ それでもお兄ちゃんはあいつの味方をするの？」

少し、いや、かなり怒り気味の伏。

まあ、確かにそうかもしない。

真希は二回も伏を殺そうとした。

伏が死ななかつたら、今、伏は死んでいるわけで。

死ななかつたとしても、地獄のような痛みを味わつてゐるわけで。それを味わわせた、つまり伏の敵ともいえる真希が勝手に自分で死のうとしているのを、助けに行くと言えば、お前はどうちの味方なんだ、と言われても仕方がないかもしない。

だが、俺にとつては伏も真希も大切な人間だ。

どうあれそれが変わることはないと思つ。

「こういう例えはしたくはないけどさ……俺は例え目の前でお前が殺されても、真希を追いかけてたと思う。それはお前が大切じゃないとか、そういうことじゃなくってさ、死んだお前よりも死のうとしている真希を優先するつてだけの話だ」

「…………」

伏は涙をこらえるような目で俺を睨み、だが、何も言わなかつた。分かつてくれたわけじゃないだろう。

だが、これ以上伏に時間を取られるわけには行かない。

「悪い、伏っ！」

俺は伏を置いて真希の逃げた方へと走る。

こつちの方向には学校がある。

まさか、あの状態のまま学校へ行く事はないだろう。他にあいつが行きそうな所。

あんな状態になつたあいつが行きそうな所。

「あそこかっ！」

俺は地面を強く蹴り、より強いダッシュでそこに向かつた。

そこは、学校の近くにある公園。

結構大きくて、林や池もある公園だが、この時間帯は通路として使つてゐる奴以外、ほとんど人はいない。

その池のほとりに、真希は立つてゐた。

ナイフがなくなつた以上、飛び降りるか溺死するかしかないと思

つたが、後者を選んだようだ。

「真希つ！」

俺は走りながら叫ぶ。

今にも飛び込もうとしていた真希が振り返る。

「来ないでっ！」

真希が叫ぶ、だが俺は、それを無視して走る。

俺の行動が想定外だったのか、あいつの動きが一瞬止まる。その瞬間に俺は真希を捕まる。

手をつかむとか、そんな状況じゃない。

暴れられたり、変な抵抗をされても困る。

俺は、真希をしつかりと抱きしめて動きを止める。

「……っ！」

俺のハグで肺を圧迫されたた真希が口から息を漏らす。

勢いで抱きしめたが、真希を抱きしめるのはこれが初めてだ。

伏よりも少しだけ肉付きがよく、柔らかな身体が、俺の腕の中で縮まり込む。

「早まつた事すんなよ！　お前が死んだらどれだけの奴が悲しむと思つてんだよ！」

抵抗はしない、俺に捕らえられた時点で真希は死ぬのを諦めていた。

「私が死んだって、誰も悲しまない……伏ちゃんを殺した私なんて、死ねばいいって、みんな思つてるからっ！」

真希の叫びは、ヤミのそれじゃなかつた。

ヤミじゃないこいつは人を殺すことはないし、それをした人間は生きていてはいけないと思つてる。

全く難儀な奴だな。

「伏は死んでないし、たとえ死んでも、お前も死ねってのは違うだろ。それに、お前が死んでも誰も悲しまないって言つたが、少なくとも俺は悲しいぞ？」

真希はゆっくりと顔を上げ、俺を見る。

「……本当？」

それがどっちの意味なのか分からぬ。

伏が生きていた事か、真希が死んだら俺が悲しむつてことか。

まあ、後者だろう。

殺そうとした奴よりも、自分が俺にどう思われるかの方が大事なはずだ。

「もちろんだ。お前とこ何年友達やつてると思つてるんだ」

「そうじやなくつて、伏ちゃんが生きてるつて本当？」

ああ、そつちだつたのかよ。

こいつもヤミでなければ伏の事ちゃんと思つててくれるのか。と、ここまで思つて、さて、伏の事をどう説明しようかと迷つた。あいつは不老不死だから、などと言つわけにはいかない。

「えーっと……何でいうか……刺さつてなかつた？ うん、そう、刺さつてなかつたんだよ！」

「……刺さつてなかつた……？」

真希が不思議そうに首を傾げる。

そりやあそつだらう、刺した本人だ。奥まで肉を刺し込んだ感触はあつただらうしな。

「まあ、お前は確かに殺人未遂だだらうけど殺しちゃいないし危害も加えてないつて事だ」

「そ、そんなはずはない……だつて、私は本当に刺したのに……」

「……錯覚じゃないか？」

苦しいとは思うが、俺はそう言つてみた。

「錯……覚……？」

「ああ、お前、あの時まともな精神状態じやなかつただろ？ だから伏を刺すつて妄想に囚われてて、それで刺したと思い込んだんじゃないのか？」

俺がそう言つても、真希はまだ半信半疑だった。

まあ、それは仕方がないだらうな。ともかく、不老不死がばれなきやいいんだ。

「よく分からぬいけど……伏ちゃんと謝らないと……」

「……そうだな」

それは、俺も同じだ。

何せ、あいつから見れば、刺された自分を置いて刺した真希を選んだんだからな。

それは考えつくした上での優先順位の問題なんだが、そんな論理的な事を簡単に納得してくれる女の子は中々いないだろ？

「はあ……」

俺はため息を一つついた。

「どうしたの？ 私、まだ何かしてた？」

「いや、そうじゃない。俺も伏に謝らなきゃならないかなと思つてたら気が重くなつてな」

「拓海くんが？ どうして？」

ここまで言つて誤魔化す必要がある事を何とか思い出した。

「いや……刺されてないつて言つても、精神的に参つてたあいつを置いてお前を追いかけてきたからな……引き止められたし、怒つてたし」

そう思つとまたため息が出そうになるが、俺よりも遙かに重い謝罪が必要な真希を前にはそれ以上落ち込めないので、我慢した。

「そうなんだ……」

だが、その真希は少しだけ嬉しそうに微笑む。

何だろ？俺にはその微笑の意味が分からぬ。

「どうして嬉しそうなんだ？」

「え？ ううん、何でもない。ただ、拓海くんがそんな時にも私を追いかけて来てくれたことが嬉しつてだけ」

本当に嬉しそうな微笑つてのはこうこうのを言つんだろうな。

まあ、そんな笑顔を見れただけでもこいつを助けた甲斐があつたかな。

「『めんなさい！ 許されないと思つけど、本当に『めんなさい』って

！」

真希が土下座しかねないくらいの勢いで頭を下げる。

「イインデスヨ、マキセンパイ。コウシティキテルンデスカラ、ダ
イジョウブテス」

棒読みを通り越して怨念のこもった声と、引きつった笑いで伏が
答える。

俺にはそれが、真希にじやなく俺に当たつた声と、引きつった笑いで伏が
に分かる。

さつきから俺を睨みつけるし、真希の見てないところで足を踏
まれたり脛を蹴られたりした。

股間に拳を入れられそうになって、それは何とか避けた。

まあ、とにかく、俺に対しても上なく怒っているのは分かる。

この怒りを鎮めるには、もう子種を差し出すしかない氣もするく

らい怒ってる。

「ただ、もうこんな事はやめましょうね。このクサレ精子……お兄
ちゃんに嫌われますよ？」

「……うん

真希は少しだけ笑う。

「ま、悪気があるうとなかろうと、殺そうとしたのは悪いことだが、
運良く生きてたんだから、もう今日の事はもういいけどせ、やつた
つてことだけは忘れないよう」

「

「真希先輩、あっちに犬がいますよ！」

伏は俺の言葉を、死ぬほどうつでもいい事で遮った。

「え？」

真希が向こうを見た瞬間、俺の顔面にハイキックが飛んできた。
いや、制服着てハイキックなんてするなよお前！

見えるよ、見えたよ！ お前チェック好きだな！

「いないよ……拓海くん、どうしたたの？」

「いや、チェックのコットンを見てたら急に顔面が痛くなつたんだ
よ」

「？？？」

真希が首を傾げる。

「ま、そんなどうでもいい事より、そろそろ学校行きましょーう！もう大遅刻ですけど！」

伏は俺のわき腹に肘を思いつくり入れながら、笑顔で言つ。

「……あ、そうだね」

真希もそれに従い歩き出す。

俺は、痛みで少しだけゆっくり歩いた。

その日の帰り道、昨日よりはましな下校になると思つていたが、まあ、やつぱりどこか気まずい雰囲気が流れていた。

まあでも、伏もヤバいと思つたのか、そんなに挑発的でもなくなつたし、真希もおとなしくなつたしで今までに比べれば、マシではあるんだが。

そんな事を考へていた時、俺はまたあいつを見つけた。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、あれ」

俺が指差す先には昨日の女の子がいた。

「あれはこの前に迷子だった子？」

真希が前方の女の子を見て言つ。

「そうですね」

「ていうか、また迷子じゃないのか？ あれ」

彼女は遠目にも分かるくらいに不安げに辺りをきょろきょろしていて、ふらふらと危なっかしく彷徨つっていた。

「そうだね、またあの、何だっけ、樋田って人とはぐれたのかなま、多分というか、間違いなくそうだわ。俺たちはその子の方へと向かつた。

「樋田あああっ！ ひだまああ！ うわ――ん！」

女の子は相変わらずの「シッククローラー」服を着ていたが、泣きながら首を振つて樋田を探していた。

中学生と思われる女の子の、本氣泣きの絶叫。

普通なら引いてしまう状況だ。

だが、妙に彼女には似合つていて、微笑ましそうを感じた。

「おーい、また会つたな

俺は声をかけてみる。

「樋田？ ジャニー、誰？」

彼女が無防備に首を傾けて俺を見上げる。

「昨日会つただろ、覚えてないか？」

「んー。あ、覚えてる！ 樋田を連れてきた人！」

妙に期待がこもつた目で少女に見られる俺。

「いや、あの時はあの樋田つて奴がいつの間にか後ろにいただけで俺が連れてきたわけじゃないんだけどさ……」

期待されても困るので、とりあえず誤解を解いておいた。

「で、どうしたんだよ？ また迷子か？」

「ち、違うわよ！ 樋田が迷子！」

泣きはらした田と、まだ少し鼻にかかつた声で、女の子が堂々と嘘をつく。

「いや、どう見ても……」

「ひーだーがーまーいー」「——！」

駄々をこねるような口調の彼女。

「まあ、どっちでもいいけど、よくはぐれるみたいだね。どこかで待ち合わせとかしてないの？」

「しない……」

女の子が悲しそうに泣きむく。

「そつかー、じゃあ……ん？ なんだこのタグ

俺は、少女が来ているロリータ服の背の部分に、タグがぶら下がつているのに気づいた。

「これは、迷子だね」

伏がそれを手に取つてみる。

「迷子札！ 橋田ああつ！」

女の子が先程まで泣きながら探していた相手に怒りだす。

「まあ、落ち着けつて、何々……『迷子のこの子を見かけたら、携帯で連絡しなさい』と言つてあげてください』つて、携帯持つてんのかよ」

「うん、持つてる」

少女はポケットから可愛い熊のストラップがついた携帯を取り出す。

「だったら、それで連絡すればいいんじやないか？」

「あ」

その手があつたか、という表情の少女。

そもそも、そんな事をいちいち迷子札に書かなくても、向こうから連絡すればいいんじやないか？

彼女は携帯を開く。

「あ、沢山着信がある…」

どうもその橋田という相手から、何度も携帯に連絡が来ていたようだ。

ああ、だからこの子からかけさせる事が必要なのか。

「もしもし、橋田？ 今どこにいるのよ！ そんな地名言われても分からぬわよ！ 屁理屁理うなつ！」

死ぬほど高圧的は口調で、ひだと思われる相手と喋つてる女の子。だがそれを平然と交わす相手の様子もまた想像出来た。

「私？ 私はここにいるわよ！ 分からぬってどういうことよ！ 近くに電柱があるわ。……誰が馬鹿なのよー 知らないわよ、日本の電柱の数なんて！」

相手はやつぱりあの橋田だらうなあ、こんなこと言つ返せるのはあいつしかいなさそうだ。

「あー、映画館の角のところって言えばこいつみー」

俺は見るに見かねて助言した

「映画館の角！」

そう叫ぶと、彼女は電話を切った。

「全く、樋田は…」

悪態をつく少女。

「あはははは…」

あの伏が苦笑いしていた。

そして、ここにいる子の女の子以外の全員が、樋田と奴に心から同情していた。

「樋田はね、屁理屈ばかり言つのよ。いつも反抗的で、本当に腹が立つわ！」

当の本人は、そんな俺らの思いなんか気づきもせずに悪態をつく。「あ、ああ……。ところで、あんたと樋田って奴は、どういう関係なんだ？」

昨日から疑問だつたんだが、歳も下のこの子が、俺らと同じくらいの歳と思われる樋田って奴を頭ごなしに怒鳴れるつてのは、普通の関係じゃない。

「樋田は私の部下よ。私が雇用主なのに…」

「……そうか」

とりあえずそつ返事してみたものの、お嬢様と執事つて、雇用主と部下つて関係じゃないよな。

といつても、こんな子が事業なんかやつてるとも思えないし、やっぱりお嬢様と執事しか考えようがないんだよな。

まあ、この子の態度や依存度から考えても部下つていつも、執事つて感じだ。

彼女の態度や樋田への依存度からも、そう考えるのが適切だ。

「まったく。いつまでかかるんのよ、樋田は… 遅すぎるわよ…」

「いや、まだ電話切つて一分も経つてないよな

さすがに俺は樋田を弁護した。

どこにいるのかは分からぬが、多分一分で来れるような場所じゃないだろう。

女の子はその後も悪態をついたりぶつぶつ言つたりして樋田を待つていた。

俺たちもほつとけばいいんだが、ここまで閑わつてしまつた以上、樋田が来るまで付き合つていた。

「ここにいましたか。探しましたよ、全く」
よしやく彼が現れたのは、十分の後だつた。

「遅い！ 何してたのよ？」

「迷子の所長を捜していました」

何の迷いもなくオブラーートにも包まず、平然と言つてのける樋田。
「電話したでしょうがっ！ いつまでかかつてんのよー。」

「映画館の角と言われて、そう簡単に分かるわけないでしょ。道
を聞いてやつとこに来れたのですよ？」

俺は樋田の弁護くらいしてやろうかと思つたが、その必要は全く
なく、樋田は完璧なる自「弁護を繰り出した。

「道くらい覚えていきなさいよー。」

「旅先の、行く予定のない場所の地理を、わざわざ迷子になる所長
のために覚える必要があるのですか？」

「まつたく、ああ言えばこいつ！」

怒る彼女に、樋田はやれやれ、と手を上げ、拓海らに振り返る。

「おや、またあなた達でしたか。今回もつひの所長がお世話になり
ました」

「お世話になつてないわよ！ お世話してたのよー。」

いや、世話になつた覚えは全くないんだが。

確かに世話つて言つても携帯で連絡しろといつただけで、礼を言
われるほどでもないんだが、世話になつた覚えはかけらもない。

「所長、嘘をつかないでください。所長がどれだけ世話になつたか
はともかく、あなたが世話をしたということは絶対にないはずです
女の子を誰よりも知つてゐる樋田は、的確に反論する。

そしてそれはずばり当たつていた。

「所長、一応外の人間にお世話になつたのなら素直に感謝くらいし

てはどうですか」

樋田の口調はいつもと全く変わらないので、それが本気の説教なんかからかいのかわっぱり分からぬ。

ない。

「…………ありがとう」

だが、女の子は樋田の言ひことを聞き、誠意の全くない、あさつての方向を向いて頬を膨らませてだが、礼らしき事を言つた。

「すみませんね、本当はいい子なんですよ」

「樋田！ あんた上司の事を何だと思つてんのよ！」

ぐい、と女の子の頭を押さえて頭を下げる樋田と、それに怒る女の子。

彼女が頭を持ち上げようとするが、樋田の力にはかなわない。

「…………ところで、あなたたちは何者なんですか？ 所長つて何か一ツクネームなんですか？」

二人の関係を不思議に思つていた三人を代表して、伏が聞いてみる。

「申し遅れました、私は不老不死研究所所員の樋田信人と申します」「不老……不死……？」

その名前に不穏なものを感じた俺は、怪訝な顔をする。そして、後ろにいる伏を少しかばうように手を広げる。

「あ、不老不死と言つても研究しているのはアンチエイジングです。ただ、くだらない所長の趣味で、こうして全国各地の不老不死伝説を見て回っているのです。こつちはその所長の水上結衣です」

「何がくだらない趣味なのよ！」

「所長、その『くだらない』は趣味にかかるのではなく、所長にかかるのですよ」

「あ、じゃあいい……ってよくない、誰がくだらないのよ！」「結衣と紹介された女の子は、よくまあそんなに元気が続くなあ、と思うほど怒鳴っていた。

樋田はそれを平然と受け流す。

で、俺の疑問が完全に晴れたわけでもなかつた。

いや、さつきの自己紹介でこいつらが何者かは分かつたんだが、所長と言つてる結衣つて子はどう見ても中学生だ。

いや、別に中学生が会社をやつてちゃ駄目なわけでもないが、こんな「シックロリータがよく似合」、やたらかんしゃくを持つてこの子が、先頭に立つて研究や事業をやつているとは到底思えない。多分他の一人も同じ事を思つてることだらう。

まあ、多少年上だが、樋田もそうだ。

俺らと大して歳が変わらないであろうこいつが、研究所で何かを研究してるとも思えない。

もしや研究所つてのはどこかの何とか研究会つてクラブみたいなもので、そこの所属なのか？

まあ、少なくとも研究所つてのは眉唾だらう。

「おや、疑わしい顔ですね。まあいたし方ないところですが、所長はこう見えてアメリカの大学のドクターコースを卒業していますし、私もマスターを卒業しています」

「へえ……」

俺はちょっと一人を見直した。

全くそうは見えないが、この子は天才なんだらう。

まあ、おそらく色々なものを犠牲にして勉強だけやってたんだろうな。

「そして、何より衝撃的なのは所長、こう見えて十七歳です」

「ええっ！？」

「なんだつて！？」

「本当に！？」

「なんでそつちに驚くのよ！」

これは衝撃以外の何ものでもない。

いや天才少女つてのも確かに意外なんだけど、この子が俺たちと同じ歳つてのが信じられない。

それはもう衝撃的だ。

見た目だけじゃなく、精神的な部分で俺たちと同じには思えない。「アンチエイジングの成果を自分で試していたら、成長が遅れたそうです。馬鹿でしょ！」

「樋田！」

「ま、頭はいいですし研究成果も凄いのですが一般的な常識を知らない事が多くて精神的な成長も遅いようなので、この格好はちょうどいいんですけどね」

「うがああああ！」

結衣が心の底からの怒りを樋田にぶつけるが、樋田は結衣の頭を押して一切の攻撃を封じていた。

「ま、僕たちの紹介はそんなところです」

片手で、結衣を押しつつ、もう一方の手を広げて言つ樋田。
そんなこいつらに、俺は少しだけほつとする。

一人の研究所が不老不死研究所というので警戒したが実際はアンチエイジングの研究所のようだ。

ま、歴史研究ならいくらでもやればいいし、そこから伏にたどり着くつて事はまずないだろう。

それなら危険はない。

少なくとも伏に危害が及ぶつて事はないだろう。

「もうつー！ 樋田はー！」

結衣は樋田への攻撃を諦め、彼から離れる。

「あんたたちはどうなのよ！ 人にだけ名乗らせてー！」

その怒りは樋田よりも簡単そうな俺たちに向けられた。

「私は、坂下真希。よろしく！」

珍しく、真希が最初に自己紹介をした。

「俺は風楼拓海。こいつは風楼伏で妹だ。よろしくな俺はそれに続き、

「うん、よろしく……風楼？」

結衣がはつと、顔を上げる。

「どうかしたか？」

その態度があまりにもおかしかったので、聞いてみた。

「単に苗字が珍しかったんでしょ。」『』『』『』
「なんですよ。ほつといてあげて下せー」

「誰が不審者よー。」

「所長がです」

「答えなくてもいいつー。」

結衣が再び怒り出す。

「自分で聞いておいて何ですかそれは」

「そういう意味で言つたんじゃないわよー。」

「じゃあ、どういう意味なんですか？」

「えーっと、この『誰が』は、疑問じゃなくてえっと……って、な

んでこんな事解説しなきゃならないのよー。」

「はいはい、分かりました、分かりました。私は部下だから理不尽な上司にも従いますよ」

樋田はやれやれ、といった態度で結衣に背を向ける。

「いつも自由なくせにー。」

「所長はいつもそんなんで、疲れませんか？」

「疲れるわよ！」

「疲れると分かって何故怒鳴るのですか？　あ、何かのスポーツみたいなものですか？」

「違うわよ！　……はあ、本当に疲れた……」

結衣はぐつたりと肩を落とす。

そんな彼女の様子を一瞬だけだが満足そうに見たのを俺は見逃さなかつた。

「所長もお疲れですから、一旦休憩しますか。それでは皆さん、また運があればお会いしましょー。」

樋田は、そう言つとすたすたと去つて行つた。

「ま、待ちなさいよ……ー。」

その後を結衣がふらふらと追いかけていった。
俺たちはしばらくそれを呆然と見つめていた。

嵐のような一人の会話に、何も反応出来なかつたんだよな。

「　帰るか」

俺がそう言つたのは、一分ほど後の事だった。

妹の部屋でおな兄ちゅあんになつた。

幕間 研究者の発見

「ちよつと、何勝手に休憩とか決めてるのよー。あと、休むならホットココアのあるところがいい！」

「何休憩取るつもりなんですか、わざわざと行きますよ」

樋田が結衣の手首をぐい、と引つ張る。

「え？ え？ さつき休むつて……」

「あれは嘘です」

「ココア飲みたい！」

「我慢してください」

結衣の駄々に、樋田は平然と答える。

「なんでよ！」

「さつきの兄妹を追うからですよ」

樋田が、今来た道をそつと戻る。

「あ、ああ、そうよ！ なんであそこド引いたのよ。色々聞けばよかつたじやないのよ」

「そうですね、滅びたはずの風樓神社の風樓家。殺されなかつた末席の一族とか、明治に入つて平民にも苗字が許されるようになつたときには勝手につけたなら、親切に教えてくれるかもしませんね」

樋田は少しだけ目を細める

「……もし、生き神を匿つていた一族の末裔で、今も匿つているのなら、風樓家という言葉に反応するだけで警戒するわよね」

結衣が腕を組んで考える。

「そうです。だから失礼を承知で所長にあんな事を言つて誤魔化したのです」

「そうだったの。」めん、樋田は本氣で言つてゐるのかと思つてた

「ええ、この機に乗じて

「うがああああつ！」

結衣の攻撃を先ほどと同様に、頭を押して交わす樋田。

「まあ、その前に不老不死研究所の名前を出したのはまずかったですね」

「それは樋田が出した！ 樋田のせい！ 樋田が悪い！」

結衣はここぞとばかりに責め立てた。

「さあ、早く行かないと見失いますよ」

樋田はあつさりそれを無視してさつさと来た道を戻つていった。結衣も樋田の背中をぽかぽかと叩きながら、後を追つた。

「ふむ、坂上という方とは別れたようですね」

先ほどの場所から、角を四つ過ぎた辺りで、真希と別れた。

「丁度いいわね、どこかに遊びに寄られたら面倒だつたし」

二人は少し離れた後ろから、ここそと後をつけた。

「所長、着替えてください。『スローリは尾行には目立ち過ぎます』

樋田はちらり、と結衣を振り返つて言う。

「無理に決まつてゐるでしょ。それに持つてきた服もみんな似たようなものばかりよ」

「パジャマがあつたじやないですか」

「余計に目立つわ！」

「おや、寄り道はするようですね」

「急に話を変えるなつ！ つて、ここはスーパー？」

拓海と伏は、帰り道にある大きめのスーパーに入つていく。

「ほら、所長の服ではスーパーは目立つじやないですか」

「へ、平気よ！ ほら、行くわよ！」

結衣は樋田の言葉を聞かず、スーパーに走つて行つた。

樋田はやれやれ、と後を追つた。

「あれ、結衣、だつけ？ 何してんだよ、こんな所で？」

角でぴょこぴょこ揺れるツインテールに呼びかけてみた。

俺は真希と別れた後、伏が夕食の材料を買いたいと言つたのでスーパーに寄つた。

そうしたら、さつき別れたばかりの結衣がそこにいた。
いや、一回会つて気まずいのか隠れてたんだが、服装が目立つか
らすぐに分かつた。

「この子、どこかに休憩しに行くつて言わなかつたつけ。
休憩に行つたんじやなかつたのか？」

「え？ えつと、その……」

結衣は妙にそわそわして、言葉に詰まつた。

「あの……ここが喫茶店かなあつて思つたから」

「じじが？ どう見てもスーパーにしか見えないと思つけど……」

「じじは極めてローカルなスーパーだ。

総合商業施設みたいに喫茶店が入つてゐるわけでもない、夕方特
売が売りの一般的なスーパーだ。

そんなものは外観で分かる。

「で、でも、ココアとか売つてるでしょ？」

「そりや、売つてると思つけど」

「ほら！ ほら！」

結衣は妙に嬉しそうに言ひ。

何だこいつ。

あー、この表情は何かを隠してそれを隠し通せた事に安堵する
顔だ。

よく見るとあたりに樋田がいない。

そうか、速攻でまた迷子になつたのかよ。

「で、樋田つて奴は？」

俺は一応確認のために聞いてみた。

「さつきまでいたけど、どこか行つちやつた……」

結衣が不安げに辺りをきょろきょろする。

やつぱりかよ。

「お前、迷子になるの早すぎるだ？」

「違うわよ！」「

「もう少し周囲を見回してだな、自分と一緒にいる人がついて来ているか確認して」「

「違う！ 今度は本当に違うの！ 横田が勝手にいなくなつたのよ！」「

結衣は必死に説明するが、さすがに「横田が迷子」説はもう信じられない。

「前の時も横田が迷子って言つてたよな」

「それに今度は、などと、これまでの迷子を認めましたね、所長」

俺の背後からの声。

相対している結衣の一瞬の喜びと、直後のほつとした表情から、振り返らなくても誰なのが分かった。

「横田！ どこに行つてたのよ！」「

結衣は半泣きの状態で横田をぽかぽかと叩く。

「一瞬で迷子になつた所長を探していました。まさかスーパーにいふとは思わなかつたのですが」「

「だよな」

俺は心からこの子の面倒を見ている横田に同情した。

「我々は確かにこの地に不慣れですから、休憩場所を探すのも一苦労ですが、さすがにスーパーに来るとは思いもしません」

「ち、違うのよ！ あの、そうじやなくて！ その……色々あるのよ！」「

もういいわけのしようがないのか歯切れの悪い事を言い出す結衣。「ま、あえて聞かないことにしまじょつ。何もない事がばれて所長が恥をかきますからね」

「違うの！ 本当にあるの！ でももう言わないつ！」「

「はいはい、分かりました、じゃ、そろそろ行きましょうか」「

横田が結衣の手を引く。

手玉に取るつてこいつことだらうか。

「ではまた、機会がありましたら　　」

「あの、よかつたら」

「樋田と結衣が去ろうとした時、それまで黙っていた伏が口を開く。
「ついで休憩して行きますか？　何もないけど、お茶くらいなら出
せると思いますから」

伏が突然そんな事を言い出したので、俺は驚いた。
こいつはもつと自分の事しか考えてないと思つてたからな。
まあ、こいつら面白そうだし、ここで別れてしまうのもなんだし、
伏が誘う気持ちも分からなくもない。

「ココアある？　ココアあるなら　　」

「所長は自重してください」

「ココア飲みたい！」

「では、ここで買って行つて、お湯をいただきましょ。よひしげ
ですか？」

「はい、構いませんよ」

伏が答える。

結衣もそれに納得したようで、このつむねこ二人組はついに来る
事になつた。

幕間 研究者の陰謀

「うまく行きましたね」

「一人の買い物を待つていい時、樋田が言つ。

「うん、ココアも売つてたし」

「そうじゃないですよ、風樓家へ堂々と訪問出来るつて事ですよ

「あ、そつか！」

「あなたは僕より頭がいいと思つていましたが」

樋田は心の底から馬鹿にした顔をする。

「わ、分かつてたわよ、だからあえて見つかったのよ!」

「まあ、そんな嘘はともかく、ここからは注意ですよ。いつものつ

つかりが出ないよう、慎重に発言してください」

「いつもつかりしてないから問題ないわね」

「その根拠のない自信は尊敬に値します」

樋田が先ほどと同じように心底馬鹿にした目で結衣を見た。

「……怒りたいところだけど、そろそろ本気で行くわよ」

「いつも本気の人が何を言つてるんですか」

「とにかく! 私たちはアンチエイジングの研究を主としている研究員。だけれども、アンチエイジングの究極である不老不死の史実についても趣味をかねて調査しているって事でいいわね」

「それ、さつき僕が言いましたよね」

「どつちが言つたとかどうでもいいの! それで少しでも手がかりをたどるのよ!」

結衣の意気込みと、いつもどおりの樋田。

「ま、私の役割は所長がドジつた時のフォローでいいですね」

「じゃ、こらないわね」

「所長、あなたの研究は確かに凄いですが、それ以外の常識を含めた能力は並以下だと、そろそろ気づいてください」

「一生気づかない! なぜならそうじゃないから!」

「まあいいです。そんなに簡単に理解してもらえるなら、今頃はもつと大人でしたでしようから。おっと、戻つてきましたよ」

結衣は何かを言い返したかったが、拓海と伏が戻つてきて、会話を聞かれるのを避けるために黙る。

二人は大きめのエコバッグを提げて、こちらに手を振つた。

「荷物、持ちましようか、所長が」

「なんで私なのよ!」

「所長が重い荷物を持つてふらふらと苦しんでいる姿を見て、私が溜飲を下げるからです」

「そんな目的のために!」

「あ、いえ、大丈夫です」

申し出とも言えない樋田の言葉を、伏はこにやかに断る。

「じゃ、行くか？」

拓海が出口を指差す。

それに伏が続き、二人が続く。

「……というわけですね、アンチエイジングの研究とは全く関係ありませんが、所長のわがままで不老不死の調査といつも樋田の旅行をしているのです」

俺んちのリビングで熱弁をふるのは樋田。それを終えて一息ついて座った。

母さんが買い物に行つて不在らしい。

てか、さつき伏と買い物に行つたんだが。

もしかしてそういう連絡一切取り合つてないのか、この一人？
かつては恋敵だつたらしいけど、少なくとも今は表面上は仲がいいと思つてたんだがな。

で、話を戻すと、樋田の隣に座つてるのは結衣。

ココアが目の前にあり、半分くらい飲まれている。

大好物であるココアが飲めたはずなのに、嬉しそうな表情じやない。

どつちかと「う」と、むすつとした表情だな。

そんな表情からしても、この子が俺と同じ歳だつて事が信じがたい。

で、この子がなんでそんな表情をしてるのかつて言えば、樋田の説明の端々に、この子を小馬鹿にする表現が盛り込まれていたからだ。

まあ、そもそも最初はこの子が説明していたんだが、言つてることがよく分からなかつたため、樋田に交代したわけだ。

「所長は研究以外残念な子なので、代わりに僕が話しましょ」
「う」
出だしから結衣を馬鹿にする表現から入り、説明の間中いたるところに彼女を馬鹿にする表現が入っていた。

少しはこの子の性格がわかつている俺や伏は、この子が怒らないことの方が不思議だつた。

しかし、そのむつすーんとした表情はこの子に合つてとても可愛いと思つ。

そう思つて微笑ましい表情をすると、隣で親父も同じ表情をしていた。

何という駄目な親子だ俺ら。

そして、俺の隣で立つてゐる伏の方から妙な殺氣が漂つてくる。

あ、これは、来るな。

何らかの攻撃が来る前兆の殺氣だこれ。

「あ、足が滑つた」

来たつ！

おそらく俺に何らかの攻撃をするつもりなのだろう、この角度からなら、多分脳天に肘だ。

「させるかつ！」

俺は上を見もせずに、脳天に手をかざし、伏の攻撃を待つ。

むにゅーん

あれ？

伏の拳は妙に柔らかいな。

俺のつかんだその拳は、弾力性に優れていて、ずっと触つていたいものだつた。

いや？

これ拳じゃないな？

だつて、拳は鼓動を打たないし、そもそも伏の拳は目の前に垂れ下がつてゐるじゃないか。

向かいでは、さっきまで怒っていた結衣が呆然と俺を見ている。

「ん……んんっ……！」

悩ましい伏の声。

ああ、もうお分かりだと思うけど、俺がつかんでいたのは、伏の乳の房だ。

まあ、伏のそれは可愛いもんだけど、胸を下に向けるとそれなりにあるんだよ、これがさ。

で、整理してみよう。

伏が狙つたのは、脳天じゃなく、おそらく股間。

若い……とは言えないが、見た目が可愛い女の子が、隙あらばそこの狙うつてのはどうかと思うから、後で説教だが、そこを狙う際、さつと構えた俺の手が伏の胸をつかんだってわけだ。

普通に女の子にやつたら顔面の中心を龍頭拳で殴られても仕方がないけど、伏には俺の股間をつかもうとしたつていう負い目もあるし、そもそも俺に欲情してほしい派だから、おそらくお咎めはなしだ。

「お兄ちゃん……やつぱり私なんだね……？」

「聞きたくはないけど、何の話だよ？」

「その口リコン狙いの計算高い女……じゃなかつた、ちょっと小さい女の子より、私なんだよね？」

断言するけど、計算高い、狙つてるのはお前の方だ。

「誰が口リコン狙いよつ！」

「そうですよ、所長は全身全霊で天然です。ゴスロリしか着ないのは、ふわふわしているので、思わず手に取つてしまつたのです」

「私は猫かつ！」

「しかしここには何も資料がないですね。他のところは本当にちょつとした伝説なのに、どこに行つても看板があつて土産もあつて、資料も比較的簡単に調べられるのに、ここにはそのようなものがほとんどありません。それどころか、住民の方でも知らないほうが多いと思われますね」

「話の変換が急すぎてついて行けない！　この怒りのぶつけ場所を用意してつ！」

結衣がぱんぱんとテーブルを叩く。

まあ、俺だつてついて行けなかつたしな。

「とりあえず、所長の足なんてどうですか？」

「じゃあ遠慮なく……」

結衣は思いつきり振りかぶつて、自分の膝を叩く。ばしゃん、と大きな音がした。

「痛いっ！　樋田つ、ここは痛いっ！」

「あなたは馬鹿ですか」

「天才つ！」

この一連のやり取りを俺は呆然と見つめていたが、俺の手はずつと伏の胸を揉んだままだつた。

「伏、そろそろ離してもいいか？」

伏が俺の手の上に自分の手を重ね、揉ませているからだ。

「もう少し……あ、ブラ取るね」

「ノーブラトリー！」

俺は思いつきり手を引いて、伏の胸から逃れた。

「このはそういう資料は大切に取り扱われていらないんだよ」

このやり取りが何一つなかつたかのようだ、親父が話し始める。

「ほう、そなんですか」

同じように何事もなかつたかのようだ、いや、ぱんぱん彼の足を叩いている結衣の手を止めつつ返す樋田。

「明治維新の際、ずっと幕府側についていたせいで、城も焼かれて今はないし、資料などの入った蔵も燃やされたそうで、そんな資料は残つてないんだ。そうでなくとも、そんな資料があつたかどうかも疑わしいみたいだけね」

「そうなのですか。こんなに遠くまで来たのに、無駄足だったようですね、所長」

樋田は自分が両手を捕まえている結衣に言つ。

結衣はじたばたそれから逃れようとしながら、わめくように言つて返す。

「無駄なんかじゃないわよ！『なにもない』って調査も立派な資料になるのよ！」

最後には体当たりをするが、今度は樋田が肩に手をまわしてそれを止める。

「何だかんだ！」の一人、仲いいよな。

「まだ調べるつもりなのですか？ 他に何か調べることなんであるんですか？」

樋田が呆れた様子で聞く。

「何があるでしょ！ じつは調査は地道なのが大事なのよ！」

妙に熱く語る結衣。

結衣は十七歳の天才少女ではあるが、見た目はゴシックロリータの中学生。

そんな彼女の熱意ある言葉は、俺の親父のようなロリコン属性も持ち合わせている人間にはたまらない事だろつ。

「ふむ、そこまでの熱意があるなら、いい事を教えようが」

親父は気をよくして口を開く。

なんだよ、まさか伏の存在を教えるつもりか？

「え？ 何か知っているんですか？」

「そうじゃない！」

「ばん、と机を叩いて親父が怒る。

「え？ え？」

怒られて戸惑う結衣。

そりやそうだろう、俺だってなんで親父が怒ったのか分からぬ。

「もつといつ、『知ってるんならせつと教えなさいよ！』って言わないと！」

親父の顔は真剣だ。

まあ、これが俺の知ってる親父らしい親父だけさ。

家族ならまだしも、人様にそれを押し付けんなよ。

「……『知つてゐるんならさつさと教えなさいよ』」

結衣も圧倒されながら、素直に言つ。

「分かつた分かつた、今教えるから」

それに親父は満足したようで手のひらを振りながらそう言つ。
死ねばいいのに。

「この町に不老不死伝説があるのは事実だ。ただ、それは人間ではなく、神という存在だったようだな。その神が我々の祖先が代々神主を務めていた風樓神社の神だったそうだ。実際、若い女性の姿をした神の姿を、村人たちも見ていたそうだ」

「うんうん」

「だが、実際にその噂を聞きつけた奴らが神社を襲撃し、神社は壊滅した。その際に、その神と言われていた女性も殺されたようだ。村人の中には見ていた人もいたらしい。その事実は翌日には村中で知る事となり、不老不死の神はいなかつたのだ、という事になつて村人たちはその話をしなくなり、領主もそれを聞いて怒り、風樓神社の再興もせず、風樓神社に関する書物も全て焼き払つたという」とらしい」

「……ふうん」

「ま、これがこの地域に伝わる不老不死伝説の実際だ。がつかりしたかい？」

「別に、どこの不老不死伝説も大体そんなものだつたから」

結衣はそう言つて、ぐい、とココアを飲む。

多少の強がりも感じるが、どつちかと「う」と諦めが強い氣もする。

「じゃあ、休憩もしたからもう行く。樋田！」

「そうですか、それではいいお話とお茶ありがとうございました」

樋田が頭を下げる。

「そうか、またいつでも来なさい」

「ああ、いつでも来いよ」

「お心遣い、ありがとうございます。では失礼します」

そう言つて樋田は、既に部屋を出ようとしている結衣に続いて帰

つて行つた。

「ふむ。いい、ツインテールだ……」

さて、これから俺は親父と伏の説教タイムに入るか。

幕間 研究者の失望と挑戦

「残念でしたね、所長」

早足で歩く結衣の後を、悠々と歩いて続く樋田。結衣の後をついて歩いているだけだが、そつち側にホテルがないことをいつ言おうかと考えていた。

「こんな事は今までいくらでもあるわよ。でも、ちょっとさつきのおじさんの話、一個だけおかしいところがあつたのよね」

「そりゃあ、本人が見てきた話というわけでもなし、矛盾くらいあるでしょ?」

「そうじやなくて、さつきその時代に領主が資料を燃やしたからもうないつて言つたわよね? でもその前には明治維新の時に焼かれたって言つてたのよ。結局どっちなのよ」

結衣は振り返り、樋田にびし、と指を突き立てた。

結衣の突然の行動に、止まりきれなかつた樋田は胸にその指があり、結衣は突き指をしかける。

「それこそ、本人が見たわけじゃないですから、どちらで焼かれたかなんて分からないつてことじやないんですか? 現実に資料はありますんし」

「そうかもしけないけど、そんな矛盾を人に説明するものかな?」

「そりゃあ、人に指摘されない限り、矛盾にすら気づかない事なんていいくらでもあるでしょ? 特に所長なんかは」

「私はないつ! とにかく、もつ少し調べるわよ! 風樓家を中心^{に!}」

結衣が再度びしつと指を突きたてる。

今度はひらりとかわす、結衣が。

「の人たちに迷惑をかけないようにしてくださいね。悪い人誰もいませんでしたし」

「分かつてゐるわよ、あの拓海と伏の兄妹も、おじさんも、親切だつたし……そういえば、なんでおじさん、こんな平日の昼に家にいたのかしらね？」

結衣が首を傾げて腕を組む。

「たまたま休みだったとか、夜勤とかじゃないんですかね？　もしくは仕事がないとか」

「まあ、そんなところよね。ま、今日は一日帰りますよ」

「休憩を最後に終わるんですか。サラリーマンなら給料泥棒と呼ばれてますね」

「払う側！」

怒鳴る結衣とそれをかわす樋田の影が、夕暮れの街へと消えていつた。

夜が來た。

また、夜が來た。

俺は夕方から親父と伏を延々説教し、伏に至つては、腹黒さや夜の襲撃に至るまで説教したのだが、おわりくわんなことは一切無視して今日も来るだろう。

そろそろ俺に安らかな夜が来てほしいものだが、その願いはいつかかなえられるんだろうか。

そんなことを考えつつ、明かりを消す。

しばらくそのまま、待機してみた。

気配はない、少なくともこの部屋にはまだ来ていないか。

俺は安心してベッドに向かう。

その時、廊下から走つてくる物音がする。

伏か、伏しかいなかつ！

走つてくるとは一体どんなつもりだよつ！

俺は飛び起きて伏がどう来てもいよいよ立つて身構える。

「お兄ちゃんつ！」

「帰れ……どうした伏？」

一言目で追い返そうと思つたが、伏の表情に真剣さ、といつか恐怖が読み取れたので、俺は眞面目に聞いた。

「部屋に何かいるつ！」

俺に抱きついてくる伏。

その腕が震えている。

不老不死のこいつが恐怖するもの？

俺はすぐには想像がつかなかつたが、女の子だし、ゴキブリとかネズミとか、そんな類だろう。

「よし、じゃ、ついて行つてやるから部屋に戻ろいな？」

俺は怖がる伏の頭を撫でながら優しく言つ。

「…………うん、怖いけど……お兄ちゃんが一緒なら……」

俺は伏が開け放したドアを出て、隣の伏の部屋に向かつ。伏は俺の背にぴつたりとくつついてついてくる。

最近は計算高く腹黒い伏ばかり見てきたから、こついう伏も可愛くていいよな。

俺は、伏の部屋のドアを開ける。

そういうえばこいつの部屋に入るのは初めてだな。

初めて見るその部屋は、俺の部屋とほぼ同じ構造で、だが、そこに置かれた家具類や小物は、いかにも女の子の部屋つて感じのものばかりで、あと、伏の匂いが漂つっている。

いや、伏の匂いだけじゃない、なんだか別の甘い香りもする。

芳香剤なりポプリなりの匂いだろうか。

間違ひなく伏はここで生活をしているんだろう。

さて、どこに何がいるんだ？

俺は部屋の外から慎重に中の様子をつかが……。

ドンッ！

後ろから体当たりを受け、俺は部屋に押し入る。

「ふ、伏？」

驚いて振り返ると、伏はにやり、とあの計算高い企み顔を俺に向け、入り口の力ギを閉める。

「お前、いつたい何の目的だよ！」

「決まってるよね。お兄ちゃんに可愛がつてもうつの」 初体験は

私の部屋でつて、やつぱり憧れるよね」

伏が夢見る少女のような表情で両手を胸の前で組む。

「知るか、帰るぞ！」

俺は伏を押しのけてドアを開け……。

「お兄ちゃん、行っちゃ、やだあ」

妙に艶めかしい声で伏がそう言つて俺にしがみつく。

伏の身体が俺の腕に当たつて、薄い脂肪の柔らかい体の感触が伝わつてくる。

ええい、そんなのいつもの事だ。

そろそろ慣れろよ俺！

だが、なんか、もうね……。

やべつ、妙にムラムラ来る。

伏に抱きつきたい。

服を脱がせて全身頬ずりしたり舐め回したりしたい。

全身と全身で、何て言つかこつ、愛し合いたい。

感情が妙に高ぶる。

なんなんだこれは！

「かかつたねお兄ちゃん」

勝ち誇ったように伏が言つ。

そんな表情も可愛い。

抱きしめて滅茶苦茶にしたい。

「な、何がだ……？」

俺は感情を押し留めて、かるうじて聞き返す。

「この部屋にはあらかじめ男の人ぐらムラムラするお香が充満してたのよ。これでお兄ちゃんはビリしても私を抱かないと思が済まないでしょ？」

確かにそうだ。

ああ、くそつ。

そこまでして俺に抱いて欲しいのかよ！

何で可愛い奴だ。

これは抱いてやらないとな！

つて、落ち着け俺！

既に感情が流されてる！

駄目だ、勢いで女の子をビリリうじちや駄目だ！

だが、俺の心はもうどうでもしようがないくらい高くぶつってる。

マイサンも、ギンギンだ。

目の前の獲物を狩り、この生意氣で勝ち誇つてる女を俺のものにして俺の下で泣かせたい。

あああああああああつ！

もう駄目だ！

こいつ抱いちまえよ！

それで誰が困るんだよ！

だが、俺は最後の一歩で踏み止まる。

「さ、お兄ちゃん、ベッドはこっちだよ

俺の手を引く伏を振りほどき、俺はその場でズボンとパンツを下す。

「お兄ちゃん！？ 早いよ、ベッドまで

そしてその場に座り込み、むんずとマイサンをつかむ。

俺に残された最後の壁、それは、G行為。

妹の部屋で、妹に見られながらのG。

いいじゃないか、俺はどうせ変態なんだよー。

「うおおおおっ！」

「ちょっとお兄ちゃん！ それ卑怯ー！」

それすらも俺にとつては、俺のGにとつてはプラスにしかならなかつた。

伏に腕にしがみつかれる。

かつた。

マイサンは一瞬で果てる。

伏は悔しそうにそれを見る。

「で、でも、まだまだっ！ お兄ちゃんはそんな程度じゃないでしょ！ まだ収まらないでしょ！ 次は私をつ！」

「何度も！ 俺の精も根も刃さるまで、何度もやつてやる！ いいか、何度も、だ！」

俺は腱鞘炎を恐れず、右腕を全力で振り回す。

その後の事はほとんど覚えてない。

十二回くらいまでは覚えているんだが、その後どうなつたかは覚えてない。

伏が俺に抱きついたり裸になつたりしたが、それは俺の行為を手助けすることにしかならなかつた。

気が付くと俺は、廊下にいた。

伏の部屋の前だ。

だるい。

下半身は裸のままだ。

多分気を失うまでやつて、伏に追い出されたんだろう。

俺は、勝つたんだ。

足腰立たないけど、何とか伏の魔の手から貞操を守り切つた。

俺は生まれたての小鹿のようにゅつくりと立ち上がる。

「あれ……」

俺の下半身は裸だつた。

周りにズボンもパンツもない。

まだ伏の部屋の中だろう。

中に入るのは恐ろしいが、あの香りももうないだろ？ 伏も寝てるだろ？。

そつとドアを開けようとするべく、鍵がかかっていた。

そう来るか……。

俺は下半身裸のまま部屋に戻った。

ロリー塔が妹をストーキングする。

幕間 研究者のストライプ

「とりあえず、昔の地図と比較してみましたが、風楼家があつた辺りはちょうど領主の住んでいた城の中になりますね」

ホテルの一室。

樋田は、ノートパソコンに計算処理をさせながら説明する。
スーツを着ているが、いかにも研究者や出来るエリートサラリーマンの風格だった。

「つてことは、もし昔から住んでいたら、風楼家は領主の敷地内に住んでたことになるわね」

考え込む結衣。

だが、ホテルのベッドでうつぶせに寝そべつて足をぶらぶらさせている姿は、どう見ても退屈そうな中学生のそれだ。
「それは分かりませんね。あの土地に後から引っ越したかもしれませんし」

「ん……風楼家がいつからあそこに住んでるのかって分からないものかな？」

「そりや、近所で聞き込みをすれば分かるかもしませんが、なかなか難しいですよね。下手をすれば本人達に『聞いて回ってる人がいる』と通報されかねませんし」

もちろん、相手に怪しまれずに情報を引き出す事も出来ない事もない。

だがそれは、聞き込みのスキルが必要で、天才の部類に入る彼らとしてもその分野では素人ではあるので難しい。

「役所で調べられないの？ そういう履歴つて」

「難しいでしょうね。特に今は個人情報に厳しくなっていますし」

「何とかしなさいよ！」

綺衣は足をばたばたさせながら怒鳴る。

「出来ませんよ、ハッキングでもしない限り」

「じゃ、ハツキングしなせによ！」

「犯罪ですよ。それにそんな技術もありません」

結衣は仰向けになつたりうつ伏せになつたりしながら、手足をば

たばたして暴れだす。

「面倒くさこよに、ほひつが立つのでやめてください」「

樋田はうつぶせになつた瞬間に、ぐい、と背中を押し

止める。

「むがああああつ！」

足ははたはたと暴れ、手は樋田を攻撃しならと暴れる

樋田はあ、とため息を一つついた。

……あまり使いたくない手ですが、大学時代の知り合いにハッカ

「ソレが口り合ひやうの、」 旅行持つて
かいきで 徒に棘木で あはれに うがひ

そんな知り合いで、技術打てるの、自利ハ、ア
て大抵はこけあどしき程度の知識しか持つ
てないわよ？」

結衣は暴れるのをやめ、起き上がって樋田の顔を見ようと思つた

「彼は恐らく本物ですよ。留年してて大学に結構長くいきますが、在

卷之三

卷之三

通志卷一百一十一

「所長は右の罠にほぐろがありますか？」

上
?

二

結衣が樋田に押さえられたまま、自分の尻を押さえる。

「やはり、あるのですか？」

「知らないわよ、自分のお尻のぼくろなんて… むしろ鏡見てチ

ックしてる方が変な人じゃないの！」

「そうですね、所長ならあることは思つたのですが

「あんたの中で、私はどんな人間なのよ！」

「変な人です」

「うがああああ

結衣は再び暴れだした。

「じゃ、とりあえず彼の腕を見るために、確認してみますか？」

「え！？」

結衣がぴたり、と暴れるのをやめる。

「だ、駄目よ！ 見ないで！ やめてよつ！」

尻とスカートを押さえつつ、樋田から逃げよつとする結衣。

「別に僕が見るとは言つてませんよ。所長が自分で確認してみますか、と言つただけです」

「あ、あ、あ、そつ……」

ゆつやくおとなしくなる結衣を解放する樋田。

結衣はベッドから起き上がり、バスルームへと向かう。

「じゃあ、確認してくるけど、覗かないでよ」

「覗きませんよ。というか、僕をどんな目で見てるんですか

「下僕！ 奴隸！ 下つ端！」

「よし、労働基準監督署はこの番号かな」

「待つて！ 部下！ 優秀で頼れる部下！」

結衣がダッシュで戻ってきて、携帯を持つ樋田の右手にしがみつ

く。

「よひしぃ。所長はもつと自分の立場をわきあえるよつ」

「うん、『めんなさい……あれ？』

結衣は、自分の立場に少し疑問を持つが、樋田が睨むのでも言
い返せなかつた。

「さあ、早く確認してくるのです

「う、うん、あのね？ 出来たらでいいんだけどね、覗かないでね……？」

純真な目で懇願されると、樋田もこれ以上はいじれなかつた。
「僕はそんなことはしません。安心してじっくり自分の尻を観察してきてください」

「うん……」

結衣はそそくさとバスルームへと消える。

ドアを閉じる前に一度だけこちらを覗いて、来てないことだけを確認した。

「全く、そんな恥じらいがあるなら、夜寝る時も持つていて欲しいものです……」

樋田はまたため息をつく。

結衣は抱き枕の代わりになる大きなぬいぐるみがないと眠れないが、旅行に持つてこれないため、代わりに樋田を抱き枕にして眠っているのだ。

見た目が中学生とはいえ、同じ歳の少女に抱きつかれて眠るというのは、樋田にとつて拷問に近い。

何しろ相手は結衣だ。

一ミリでもムラつと来たら、後で大きな自己嫌悪に陥つてしまつ。だが、結衣も小さいが可愛い女の子であり、寝息や寝言を聞いていると、どうにもそういう気分にならない方がおかしい。

「あつた！」

樋田に最大限女の魅力を振りまいている少女は、今一人で鏡に向かつて尻を出して叫んでいる。

「あつたよ、ひだぶつ！」

ガゴン！

バスルームで大きな音がした。

「痛い、パンツ上げるの忘れてた……」

そんな声に、頭を押さえる樋田。

それから一分くらい、「痛い痛い」と声が聞こえてきて、その後やつと結衣が出てきた。

「あつたよ樋田！ その人凄いね！」

無邪気にハツカ―を称える結衣。

「……まあ、所長がそれで満足ならいいです」

自分の身体の、普段見せない部分の秘密を、見たこともない他人が知つていたら、普通は気味が悪いものだ。そう考えない者は幸せなのかも知れない。

あるいは不幸なのかもしれない

ともかく樋田は何も言わなかつた。

更に、そのハツカ―が重度のロリコンで、当時十歳を少し過ぎた程度だつた結衣の事をストライクゾーンの対象者として見ていた事も黙つておく事にした。

「とりあえず、彼に連絡してみましょ。頼みを聞いてくれればいいのですが」

樋田は再び携帯を取り出し、アドレスを漁る。

「大学時代の友達」カテーテゴリの中から、一つの電話番号を見つけ、ボタンを押す。

『久しぶりだね、ジョニー。僕だ、ノブティーだ』

樋田が陽気な口調と流暢な英語で話す。

「あんたつて、そんな陽気にも話せるのね。つていうかノブティーつて誰よ……」

ともかくこう見えて、大学時代はそれなりに陽気な学生だつたようだ。

『ああ、そう、彼女のところで働いてるんだ。いや、もう君の対象外かもしれないね、ははは』

結衣も当然英語は話せるので、話の内容は分かる。だが、何を言つているのかまでは分からぬ。

おそらく電話でなく、目の前に一人がいて、会話していくも分か

らなかつただろつ。

『ところで君の力を借りたいんだ。いや、君の研究は尊敬に値するがそつちじやない。そうそつちの方だ。いいのかい？ さすがは偉大な僕の友達だ。うん、今から詳しい事を話すよ、いいかい』

樋田は、ハツカージョニーに調査対象について話す。

結衣はじつとそれを聞いているだけだが、樋田が間違いなく、この街の風樓家について、所有する土地の所有開始日時や歴史的な経緯、また一家の分かる範囲での情報を調べて欲しいと頼んでいたのを聞いていた。

『報酬？ いいよ、僕に払える範囲なら。君の事だからお金じゃないんだろう？ ……ふむ、それは僕からは聞きにくいな、本人に直接聞いてくれないか』

樋田はそう言つと、携帯を結衣に手渡す。

「？」

いきなり携帯を渡された結衣は不思議そうに樋田を見上げた。

「代わつて欲しいそうです。聞きたいことがあるみたいで」

「うん、わかつた……」

結衣は不思議そうに携帯を耳に当てる。

『ここにちは、初めまして。え？ う、うん。あ、うん……、えつと、水色と白のストライプかな。え？ やつてくれる？ 力が出た？ うん、じや……』

結衣は携帯を切り、樋田に返す。

「やつてくれるって。私のファンだから、声を聞けただけで十分だつて」

結衣は戸惑いながらも、少し嬉しそうにそう言つた。

樋田はジョニーにも結衣にも色々突つ込みたいことはあつたが、黙つてため息をついた。

「まあ、所長とジョニーがそれで満足ならいいです」

樋田は携帯をしまつて、更にもう一度ため息をついた。

「ま、彼の仕事は早いので、今日中に調査もし終わる事でしょう。

それまで「ひからで出来る事もありませんからのんびりしましょ」

「樋田はパソコンの電源を落とし、ソファに腰掛ける。

「うん、じゃ、のんびりココアを飲むわよー」の前買つたやつー。

「樋田は準備ー！」

「自分でしてください」

樋田がけだるげに、結衣を見もせずに言ひ。

「樋田はいつかひどい目に遭うー！」

物騒な事を言いながらも棚からカシップを一つ用意していた。

次の日の朝、伏はいつものように前の日のことがなかつたかのような反応かと思つたが、はつきり不機嫌だつた。

台所に行くと、不機嫌な伏が全身から不機嫌オーラを出していた。俺が降りてきたのを見て睨み付け、ふん、とそっぽを向いた。

「お、おはよー」

俺はその不機嫌な様子に圧倒されつつも、挨拶をした。

「おはよー、おな兄ちゃん」

伏は不機嫌な表情のままで、それでもきちんと挨拶を……。

オナニーちゃん！？

いや、聞き間違えかな？

昨日の罪悪感が俺にそういう聞き間違いをさせてしまつたのかもな。

「あー、体がイカ臭い！ 昨日、どこかの意気地なしが私の部屋で汚いもの出しまくつてつたせいかな」

怒つてゐるー

逃げたことよりも、部屋をアレまみれにしたことを怒つてゐる！

確かにティッシュも何もなく、部屋の中に放出し放題だったから、普通なら怒る。

「……」めん

「何謝つてんの、おな兄ちゃん？」

「悪かつたからその呼び名はやめてくれないかな？」

俺が懇願の表情で伏に訴える。

「だから、何が悪かつたの？ 何をしたの、おな兄ちゃんは？」

「その、お前の部屋で……いろいろとさ……」

「いろいろって何？ 何したんだっけ？」

伏の追及は止まらない。

やばい、伏は本氣で怒つてゐる。

「その……おな……」

「なあに？ おな、何なの？」

なんだこの羞恥プレイ。

そんなもん母さんと妹の前で言えるかよ！

「い、行つてきますっ！」

俺は飯も食べずに家を出た。

「あ、ちょ、ちょっと！」

さすがにそれは予想外だつたのか、伏が慌てて追いかけてきた。このままダッシュで学校まで行こうと思つたが、朝食抜きにはかなりきつい。

俺はすぐに走るのをやめ、歩くことにした。

「もうっ、お兄ちゃんは自由なんだから！」

追いかけてきた伏にそう怒られる。

いや、ミスフリーダムには言われたくないな。

「ま、でも、さつきは言い過ぎたね、ごめん」

さつきまでの熊殺しの目とは違い、いつもの伏の表情だ。

どっちが本当の伏なんだろう。

いや、どっちも伏なんだろうけど、長く生きてるといろいろ人格もあるんだろう。

「いや、まあ、俺も部屋汚して悪かつたな……」

正直、それに関しては本当に申し訳ないと思つてい。

緊急避難なんだろうけど、他にもいくらでもやりようがあつたか

もしれない。

「まあ、仕方がないね。許してあげるけど、ただじゃ嫌だよ」「何だ？子種以外なら大体のものは構わないぞ？」

「んー、じゃあ……」

伏は口に指を当て、少し考える。

「今日服買いに行くんだけど、それに付き合つて？」

「はつと思いついたように言つ。」

「まあ、それくらいならいいけど」

別にどうせ一緒に帰るし、そのまま買い物に付き合つ程度の話だらうし、こんなことがなくとも付き合つてもいいくらうだ。

「本当？じゃ、放課後に！」

そう言つて伏はぴょん、と跳ねた。
髪がふわりと舞つた。

幕間 研究者とハッカー

「あ、ジョニーから返事が来ましたよ」

「んあ？」

中華料理店の奥の席。

樋田が持ち込んだノートパソコンでメールを確認して、報告をする。

情報を迅速に知りたいであらう結衣のためにわざわざ持ち込んでチェックしていたのだ。

結衣は、から揚げを口いっぱい頬張つていた。

「そんなことより、このから揚げおいしいよ！」

結衣の方は、それよりも田の前の料理に夢中だった。

「まあ、食べながら聞いてください。メールをある程度要約して読みますので」

「うん、この春巻きもおいしい！」

「笑わせて吹き出させてやりたいですが許しましょ。えーっと、あの土地は少なくとも資料にある限りではずっと風楼家のものですね。ただしそれも昭和初期までしか連れなかつたようで、それ以前は不明だそうです」

樋田は淡々とメールを読む。

「で、我々と同年代の二人は近くの高校に通う高校生の兄妹で、兄の拓海さんは成績も普通で、問題のある生徒ではないそうです。妹の方は最近あの高校に転校してきましたよ。それ以前どこにいたかもしれませんねなかつたみたいです。おそらく海外に居たのでは、との事です。学校の記録ではそうなつていたようです」

そこに注記で「あと三年早く出会いたかった」と書いてあったのは無視した。

「むぐむじむぐう

「人間の言葉で喋つてください」

樋田は振り返りもせずに、結衣に言ひ。

「あのお父さん、勝徳さんとおっしゃるそうですが、彼は一ートだそうです。これまでに一度も働いた形跡がないそうです」

「うえ？ うあうおほひえ？」

「お会いした事がありませんが、奥さんは祥陽さん。専業主婦だそうです」

「つおうえつ へうおははひうはうい？」

面倒になり、イライラもしてきたので、樋田は結衣の前のから揚げと春巻きを取り上げた。

「むう！ むぐう！」

結衣は取り返そうとするが、樋田はそれを上に掲げて、結衣の手の届かないところへと持つて行った。

口の中の食物はすぐになくなり、普通に喋れるよつになつた。

「何すんのよ！ まだ食べたい！」

「食べながらいこと言いましたが、やつぱりやめてください」

「食べる！ まだ食べる！」

結衣が必死に樋田から料理皿を取り返そうとする。

「……じゃ、食べてもいいですか、喋れる程度にしてください。喋れなくなつた瞬間、これは僕のものになります」

「え！？ ……わ、分かったわよ」

妙に緊張しながら結衣が答える。

一応は彼女も素直になつたので、樋田は続きを話す。

「おそらく、さつき所長が言つたかったのは、あの一家の収入のことでしょう。それはジョニーも不思議に思つて調べたそうです。すると、毎月市から一定額が彼の銀行口座に振り込まれていたそうです」

「市から？ それは病気なんかで働けない人がもらえる給付金みたいなもの？」

結衣は春巻きを口に入れながらも頑張つて喋る。

「どうも、その手の予算から出でているようではないようです。予算の出所から言えば、機密に類する予算ですね」

「……なによそれ、つまりあの人は市から機密費をもらつて、働かずにつれてるの？」

「そういうことになりますね。そして、歴史的背景から考へるにそれは不老不死に関する機密。となると」

「あのおじさんが、不老不死の生き神？」

「その可能性が高いですね」

樋田はパソコンをしまい、食事に戻る。

「もちろん、そうでない可能性の方が高いですし、僕は今でもその存在は信じていませんが、調べる価値はあるでしょう」

「むうん」

結衣は腕を組んで考へる。

「……そうね。早速昼からあの家に行きましようか、ううん、今かううん」

結衣は腕を組んで考へる。

「行くわよ、樋田！」

「僕はまだ食事中です。もう少し待つてください」

樋田は平然と座り、食事を続けていた。

「遅い！ のろま！ 置いてくわよ！」

いつも食事が遅いと言われている結衣は「とにかくに樋田を責めた。

「別にいいですよ、置いて行つても。一人でたどり着けるな」「た、たどり着けるわよ……！」

昨日行つたばかりの道はある。

だが、結衣が覚えているわけがないと樋田は思つてこるし、事実覚えてはいなかつた。

「万一たどり着けたとしても、どんな駆け引きの人から情報を得るのですか？ 所長に出来ますか？」

「う……。で、出来るわよ！ 出来るけど、樋田が可哀想だから待つてあげるわよ！」

結衣は座り直す。

「そうですか。ありがとうございます」

「つて、なに人のから揚げ食べるのよ！」

「所長は既に食事を終えているのでしょうか？」

「終えてない！ 食べる！ まだ食べるの！」

結衣の声が、店内に響き渡つた。

「いませんね」

風樓家の家の前。

何度も呼び鈴を押しが誰も出で来ない。

「なんですよ！ 二ートなんでしょ？」

「二ートと引きこもりは違いますよ。働いていないからといって、家にこもつてゐるわけでもないです」

「あーもう、こんな時に！」「

結衣は手をばたばたと振る。

「いや、じつちの勝手な都合でしょ」「

あまりの理不尽な物言いに、樋田はついフォローした。

「それに急がないと逃げるわけでもないですから、出直しましょ」「

結衣はぶつぶつ言つが、それに従う。

風樓家を背に駅の方へ戻る一人。

結衣はすつと不満をぼやいていた。

「はあ、こんな事ならもう少しじつくり中華料理を食べておけばよかつた！」

結衣は手でばんばんと自分の横腿を叩きながら言つ。

「所長は中華が好きなのですか。初耳でした」

「今が中華の気分なの！」

それくらい分かるでしょ、とでも言いたげに結衣が言つ。

樋田は面倒なのでスルーしようとかと思つたがふと、聞いてみたいことがあつた。

「では、夜には何の気分になりますか

「そんなの分かるわけないでしょ」

「焼肉」

「え？」

樋田が唐突に言つので、結衣も戸惑つ。

「カルビ、タン塩、豚トロ。焼きたてはおいしいですね。秘伝のた
れがある店なんて、最高ですよね」

「う、うん……」

結衣は樋田の言葉にそれを想像し、軽くよだれが出てそうなほどになつていた。

「焼肉？」

「焼肉！」

不思議な会話が成立した。

「今夜は焼肉！」

昼を食べ終わつて一時間も経つていない午後に、彼らは既に夕食のメニューを決めた。

「今夜は焼き肉にして、性……精をつけよっ！」

伏の要望で服屋に向かう途中、突然そんなことを言い出した。こつちは真希の恨みがましい目を振り切つて伏とこつちに来て、呪われないか気が気でなかつた。

「焼き肉か。まあ、精が付くかはともかく、嫌いじゃないな」

ま、焼き肉が嫌いってのはマイノリティーだろう。

「じゃ、決定！ 今夜は焼き肉！ 媚や……ニンニクとショウガも入れないとね」

「ちょっと待て、今、何て言いかけた！」

媚薬つて言わなかつたか？

まだあれをするつもりか？

俺を内部からムラムラさせるつもりか？

あれはきつかつた！

これまでの攻撃の中でも最大級にきつかつた！

あれだけ部屋を汚されて、まだ懲りないのか？

いや……こいつの目的は、俺の部屋だ。

わざわざこいつの部屋に行かせる必要はない。

俺の部屋でやればいいだけだ。

俺が部屋を汚すのに一瞬でも躊躇すれば、そこをつかれる。

まずい、これはまずい。

「よし、焼き肉は中止！」

俺は一方的に宣言した。

「ええええええつ！ どうしてよつー」

伏が不満げに声を上げる。

「今日は焼き肉の気分じゃないんだよ、今日はイタリアンがいい

「わかったよ、じゃあペペロンチーノね。ガーリックが匂いを消してくれるから

」

「いや、和食がいい！ そばだ、そう、そばがいい！」

「…………」

伏が無言で俺を睨む。

腹黒い伏じゃなく、可愛い伏の方で、どっちかと言えばすねて膨れている感じだ。

「わかったよ。ち……そばね？ もう絶対変えない？」「ん？ なんか言おうとしてなかつたか？
まあいい、そばなら余計な味を混ぜるとすぐにわかる。ネギもショウガもワサビも使わなきゃいいんだ。

俺の勝ちだな、これ。

「おい、いいぞ？ 絶対変えない」

俺は絶対の余裕を持つてそう返した。

すると今の今まで悔しそうな顔だつた伏が、にやり、と笑う。

「そう、絶対変えないならいいかな。中華そばで「

諮詢された！

「いや、中華じゃなく普通の」

「もう変えないって言った！ もう変わらない！」

くつ、やられた。

まあ、こいつの調理をずっと見てて、怪しい動きを封じればいいか。

「わかったよ。それでいい」

俺はより深い罠にハマろうとしていたのかも知れない。

妹は不老不死

幕間 研究者と生き神？

「疲れた」

結衣がぼそりと言つ。

「そうですか。それはともかく

「疲れた！」

今度は大きな声で言い、手をばたばたと動かす。

「元気そうですね」

「疲れたって言つてるでしょうが！」

結衣が言つたが、樋田はあっさり無視しようとしたので、彼女は座り込んだ。

「疲れた！ もう動かない！ 樋田の出来る事は私をおんぶするか、休憩を取る事！」

結衣のわがままは今に始まつた事ではなく、樋田も慣れていたが、それでもため息を一つ吐き出した。

「うーごかーないーーーーー！」

そう大声で宣言した結衣は、一步も動く気配はなかつた。確かに樋田も多少は疲れていた。

駅前にあるホテルと風楼家を三往復半。

四度行つてもずつと留守だつたため、今は四度目の復路なのだ。短時間に四度も訪れたのは、結衣のせいなのだ。

ホテルに戻つて、部屋をうるうりとして落ち着かず、すぐに「行くわよ！」と言つてまた出でくる。

のんびり確實にいるであろう時間まで待つなり、風楼家の周辺で時間を潰すなどという発想は彼女にはないのだ。

「コーコーアーのーむーーーーー！」

元気にそう叫ぶ結衣を一番苦しい目にあわせるにはどうすればいい

いかを知らず知らずのうちに心で考えていた樋田。

「ホテルに戻れば休憩なんていくらでも出来るじゃないですか」

「嫌！ココア飲みたい！」

「この前買ったのがあるでしょ?」

「他のを飲むの！」

まあ、いいですか？」

樋田はため息をもう一息吐いた。

普通に喫茶店にでも行こうと言われたら、断る理由はない。

だが、こうも駄々とわがままから始まると、こちらもまずはスルからへりこみしまう。

年上ばかりだつた事もあり、甘え体質があるのかもしれない。
そんなどうでもいい事を考えつとも樋田は「ア」のある喫茶店を
頭の中でリストアップした。

「あ、あればおじさん?」

植田が最も近く、緑衣も気に入っている店を頭の中で検索し終えた頃、彼女がある方向を指差した。

そこには確かに風樓家の主であり、不老不死と予想される、風樓

「ニヤヽヽニ トヨココヽ 次ノヽ行ヽ うヽ

「アホですかあんたは」

「なにがよ?」

店に向かおうとする結衣の手首を掴む樋田。

「ココア飲んでる間にどこか行つてしまひますよ」

「仕方がないわね！」ア飲んでる間待つひひひ語りといひ

樋田は結衣の手を引く。

半泣きの結衣を連れて、樋田が走る。

ゆつくりと街を歩いていた勝徳には、それでも簡単に追いついた。

「ほんにちは、風樓さん」

樋田がまずは声をかける。

「おや、確か樋田君と、水上さん。奇遇だね」

勝徳は一人に気づくと、にこやかに挨拶を返す。

「ココアー！」

「？」

「ココア飲むのー！」

半泣きでいきなりそんな事を言われた勝徳は、それでも冷静に対応した。

「そうか、ココアが飲みたいのか。どこかに行くかい？」

樋田は所長の言つ事は気にしないでください、などと言おうと思つたが、一緒に喫茶店に行くのは絶好の機会だと判断し、黙つていた。

「うんっー！」

結衣は嬉しそうに笑い、勝徳はそれを見て、やはり微笑んだ。

このまま喫茶店へ行つて、それとなく相手を探ろう。

そんなことを考えていた樋田の計画を、思いつきり破壊したのは、結衣だつた。

「ねえ、おじさんって不老不死？」

直球も直球、これ以上、簡潔に言つようのないくらいの直球で、結衣が聞く。

樋田はしばらぐ、結衣の言葉の意味を理解していなかつた。どうせまたいつもぐだらない話だと考えてスルーするつもりだつたからだ。

更に、さすがに結衣とはいえ、この状況でそんな事を言つとは思わなかつたのだ。

「あー……すみませんね、うちの所長が馬鹿な事言い出して」

樋田は拳で結衣の頭をぐりぐりと地味に痛めつけつつも、そう言
われた勝徳の様子をじっくりと探っていた。

「ふむ……確かに面白い子だね」

勝徳は表情を見せない。

相変わらず、穏やかに笑いながら二人を見返していた。

「しらばっくれても無駄よ！ あなたが不老不死だってことは既に
ばれふごう！」

樋田は結衣の口を塞ぐ。

これ以上彼のシナリオを変更されても困るからだ。

とはいって、ここまで話してしまった以上、少しづつ話を引き出す

という、最初の策はもう無理だろ。

ならば作戦を切り替えるしかない。

「すみませんね、うちの所長は知ってる事を全て言わなければ済ま
ない人間なんで」

「そうか。ふむ、そんな性格は嫌いじゃないが、おやらく体力がい
る生き方だね。それに人から嫌われる恐れもある」

「おや、気が合いそうですね。僕もそう思います」

樋田は、結衣の口だけでなく、何となくついでに鼻もつまみながらにこやかにそう答えた。

「特にこのようないじめ自身が黙つて秘密にしているようなことを、
こんな場所で大声で言うものではないですね」

樋田の、力マをかけた言葉にも、勝徳は応じない。

ただ、一コ二コと笑っているだけだ。

結衣は息が出来なくなり、もがき苦しんでいる。

「しかし、我々も研究者として、発見したものを見過ごす事は出来
ないのです。どうか協力していただけませんか？」

樋田の要求。

それでも態度を変えない勝徳。

死にかけている結衣。

「一つだけ、本当のことを言おう」

表情を変えないまま、樋田を見つめる勝徳。

「今から言つことは、真実だ」

堂々と、にこやかな口調は変わらないが、断定的で有無を言わさない物言い。

「私は、不老不死などではない。証明は、死ななければ出来ないかな？」

勝徳は、少し冗談ぽい口調を交える。

「君達も伝説は伝説として、調べるのはいいんだが」

「では、一度死んでいただきましょうか」

勝徳の言葉の最中、樋田がそれを遮つて、ポケットからナイフを取り出す。

軍人が持つていそうな、街で職務質問されて出てきたら、逮捕されそうなナイフだ。

「ほう……立派なナイフだね」

「ふはっ！ はあ、はあ……ひ、樋田！？」

樋田の手から開放された結衣すらも、樋田の突然の行動に慌てる。「刺して、私が死んだら、君は殺人犯、よくて殺人未遂と傷害なんて重罪になるんだけど、君の一生はこんな親父に捧げられるほど安っぽいものかい？」

刃物を目の前にして、全く動じない勝徳。

距離を取る、防御の構えをするなどといふこともなく、刺したいのなら刺してみると言わんばかりの態度だ。

「僕の一生は、この所長に関わつて以来、ずっと安っぽいものですよ……！」

言い終わるが早いか、樋田はナイフを勝徳の胸に突き立てる。

勝徳は避ける動作も見せず、平然とナイフと樋田を見つめていた。

「ちょ……え？ 樋田つ……！」

樋田が持つナイフが勝徳の胸の辺りに押し入り、もはや柄しか見えない。

「少しは怖がつたりした方がそれっぽいですよ」

樋田はさつとナイフを引く。

「いや、私も同じナイフを持つてるからね。君の考えている事は分かつてしまつたんだよ」

お互いに笑う樋田と勝徳。

「え？ え？」

一人意味の分かっていない結衣。

「ダミーナイフですよ。刃がプラスチックで、押すと柄の中に引っ込むタイプの」

樋田はナイフを引き、結衣に分かりやすく刃の部分を押して見せる。

「失礼しました風樓さん。ですが、これではあなたが不老不死でないという証拠が」

ボンツ！

樋田が勝徳に話をしている時、彼の背後で大きな音が響いた。向かい合う勝徳の視線と表情。

後ろは交通量の多い道。

車の事故か、などと考えながら振り返る。

彼が見たのは、制服を着た少女が、頭から地面に叩きつけられる瞬間だった。

今になつてやつと響くブレーキ音。

どう考へても女生徒は助からない状況だ。状況が分からぬ。

横断歩道でもない道の途中。

自殺でも考へない限り発生し得ない現状だ。

道路の向こうから、男子生徒の叫び声がする。

どこかで聞いたその声の主を確認している最中。

「む、まずい！」

勝徳が叫ぶように言い、事故現場へと走り出す。

周囲もまだ状況を理解していない事故直後。

樋田も、結衣も、呆然とその状況を見ることしか出来なかつた。

「結局買わないのかよ。」

服を買いに行くから、と言つた伏だつたが、結局何も買わず店から出てきた。

駅前の大通り沿いを歩く俺と伏。

田の前の道は結構広く、車も多く行きかう。

そんな中、俺は徒労に肩を落としていた。

一軒だけつて話じやない。

七軒回つての話だ。

こつちは無駄に疲れた。

まあ、可愛い妹の着る服だから、俺も一生懸命に選んださ。

伏はそれを全部試着して見せて、俺も可愛いと思つたし、じゃあ買えばいいんだが、買うところまではいかなかつた。

「ま、今日は見に来ただけだからね」

「じゃあ、最初からそう言えよ。俺は結構本気で選んだんだぞ？」

「うん、お兄ちゃんの好みは分かつた。買うときはそういうの選ぼうかな」

「……したけりやそうしろよ」

真正面から言わると照れくさいもので、俺はふい、と横を向いた。

「ん？」

横を向いたその先、大通りの向こうには親父がいた。

それに向かい合つて、身長差のある二人組が立つていた。

「あれは、結衣と樋田か？」

少し遠いが、おそらく親父と話す一人組というとあの一人しか思

い浮かばない。

「え？ どこ？」

伏もそつちを見る。

「あ、本当。何してるのかな？」

「さあなあ。また親父が変な要求してなきゃいいんだがな」
あの親父のベストストライクゾーンだからな、結衣は。
結構穏やかに話してるから大丈夫だとは思うが。
ん？

樋田が何か出したな。

あれはナイフか？

何するつもりだよ、あいつ。

『あつ！』

俺と伏の声が重なる。

樋田が、そのナイフで親父を刺したからだ。

え？ 見間違えか？

いや、本当に刺してみるみつこ。

「勝徳さんっ！」

伏が、走り出していた。

しかも、一直線にだ。

俺たちと親父たちとの間には車通りの激しい道があり、それは信号でもない限り渡れない交通量だ。

だが、それがまったく見えないかのように。伏は走り出した。

俺はそれを止める間もなかつた。

車は、急に飛び出して来た者に對して、何の容赦もなかつた。
減速するまもなく、伏は車にはねられる。

ボンッ！

当たりの人が全員振り返るくらいの大きな音が響く。

伏が大空へと浮かび上がる。

妙にゆっくりと、放射線状に落ちていく伏。
地面には頭から叩きつけられ、体がそれに続々、一度バウンドを

した後、アスファルトに沈む。

辺りには血飛沫が舞う。

伏は痙攣すらしない。

これは、かなり派手な事故だ。

普通の人間なら即死なんてもんじゃない。

伏なら生きてるだろう、だが、体の損壊が激しい。
どうする？

どうしよう。

俺はその場から一步も動けずにいた。
手足が震えている。

何とかしないと、でも何をすればいいんだ？

「拓海！ 手伝え！」

親父の怒鳴り声に、俺はやっと我を取り戻す。

「あ、ああ……！」

俺は事故現場に走る。

親父が上半身を持つていたので、俺は足を持つた。
「ひとまずここから逃げるぞ？」

「ああ！」

俺と親父は、呆然とする加害者を背に、死体にしか見えない伏を
抱いで走り去った。

「ここまで来ればいいか……すまんが拓海、後は一人で背負ってくれるか？」

親父の息が上がっていた。

まあ、運動まったくしてない親父だから仕方がない。

「わかった」

俺は伏を一人で背負うこととした。

伏は全く動かない。

全身の肌の色も俺の知るものじゃなかつた。

白い肌も赤紫になつており、全身内出血してゐるんだらう。

頭蓋骨は陥没してゐるかもしない。

ナイフで刺されてすぐ治るのとはわけが違つ。

これが治るにはどれくらいかかるんだろうか？

家に戻り、ソファに寝かせると、俺と親父はふう、と一息ついた。伏の様子はさつきと変わつてない。

車にはねられてから結構時間が経つたが、全く変わつてなかつた。これは結構時間がかかりそうだな。

「あ、あの……」

遠慮がちに、声をかけてきたのは、結衣だった。

あれ、なんでこいつうちにいるんだ？

「どうして救急車を呼んだりしないの……？ 大怪我して、死んでるかもしれないのに、こんなところに寝かせておいていいの？」

結衣の疑問は当然の事だろうな。

だが、これはどう誤魔化せばいいんだろう。

いや、よく考えたら伏が走り出したのつて、じつらが親父刺してたからじやないか？

「そういえばあんたら、さつき何してたんだよ。親父をナイフで刺そうとしてなかつたか？」

「あの、その、それは……」

別に責める口調で言つたわけじゃないが、俺も少し動転してゐるので怒つてたのかもしれない。

結衣はしどろもどろで戸惑つた。

「勝徳さんが、不老不死ではないかと、カマをかけていたのですよ」

結衣は俺が怖いのか何か後ろ暗いのか分からぬが何も言えない。代わりに樋田がいつも見る表情と平然とした口調でそつと言つた。

「まさか、伏さんの方だとは思いませんでしたが」

悪びれもしない、あまりの平然とした口調に、俺は何も言い返せなかつた。

それは事実であり、何一つ間違つてはいない。
さて、こいつらを説得しないとなあ。

「え？ あ、そうか！ だから救急車呼ばなかつたんだ！」
結衣が初めて気づいたらしくそう言つて驚く。

前々から思つてたんだが、この子は本当に天才なのか？
まずいな、こいつらが本当に天才だとして、不老不死なんて格好の研究材料をほつとくわけないよな。

俺は助けを求めるように親父を見た。

「言い逃れ出来ないな」

観念したように、親父は目を閉じる。

「そう、この子が不老不死だ。何年生きているかは知らないが、本
人によると、少なくとも千年は生きているよつだ」

今はとても生きているよつには思えない、遺体のような伏を見て
言つ。

まあ、正直に俺たちの使命までを言つた上で頭を下げて懇願する
のが一番か。

「殺しても死なない、刺しても死なないって、本当？」

それは後で思えば興味本位の言葉だったと思う。

だが、結衣のその言葉を聞いて、俺は冷静さを失つた。

「てめえ！」

俺は立ち上がり結衣の胸ぐらをつかむ。

「きやんつ！」

結衣の怯えた表情。

隣にいる樋田も立ち上がり緊張する。

「確かに、伏は刺されてもしないさ。でもな、刺されたら痛い
んだよ！ 刺されて、死なないって事は刺されたままならずつと痛
いんだよ！ そんなことを興味本位で試そつとするなよ！ お前も
同じ痛みをさせてやるからな！」

そんな言葉が口から出てくる俺に、俺自身が驚いた。

俺にとつて伏は可愛いが厄介者だった。

あいつの行動一つ一つが面倒だとも思つた。

だが、俺はあいつのそばで四回あいつが死んだのを見ている。その時のある表情は苦しそうで、痛そつた。

俺自身四回も殺しておいて、人が殺そつとすると激怒するつてのもおかしな話だし、自分勝手な話だ。

そこまでわかつていて、それでも俺は怒つた。

俺は伏を守る使命を持っている。

いや、使命なんてなくとも、俺は伏を守る。

一度とこんな日には遭わせない！

「……は、はひ……」

恐怖で手足も声も震え、目から涙がにじみ出でている結衣。

あー……落ち着いてきたら、悪いことしたな。

俺は手を離したが、ばつが悪いのでそのままソファに戻つた。

「落ち着け、拓海。彼女は別に刺すとは言つてないぞ？」

ああ、既にもう冷静だよ。

だが、今更止められないだろ？

「でも、こいつらは親父は刺そうとしたんだろ？」

俺はそのまま怒りモードで突つ走ることにした。

「いえ、あれは玩具のナイフですよ。刺してもし違つたらただの通り魔ですし

こんな最悪の空氣の中でも、相変わらずの声と表情で樋田がナイフを見せる。

「所長」

「え？」

俺に怒鳴られた後、震えていた結衣が振り返つた瞬間、そのナイフを胸に刺す。

「ぎやあああああああ！」

結衣の本気の悲鳴。

いや、あなたは知つてるだろ。

「ほら」

樋田がナイフを抜くと、柄の奥から刃が出て来る。

結衣は怒鳴る余裕もなく、ソファに埋もれて震えていた。

それを見ると、俺もなんだか馬鹿らしくなってしまった。

あー、樋田は空氣を変えるためにあんなことをしたのかもな。

「なあ、樋田君、水上さんも

「分かつてますよ。他言はしませんし、彼女に傷害を与えるような真似はしません。それは我々の本意ではありませんから」

父の言葉を遮つて、樋田が答える。

「どうか、助かるよ

父は、ふう、と深くソファに座り直す。

最初からそのつもりだったのかよ。

そうなると頭に血が上つて怒鳴った俺は、自分が恥ずかしくなつてきた。

「ここは謝るべきかな?

「ところで所長、ちびりましたか?」

樋田が隣で呆然としてる結衣に聞く。

「うん、ちょっとだけ……ってちびつてないわよ!」

「嘘はいけません。さつたと着替えてきてください。そのつまらないますよ?」

「だからー、ちびつてないって言つてるでしょー!」

場所柄をわきまえないというか、あえてそういうして樋田に乗せられて、結衣も騒ぐ。

やつぱりここは謝らないとなあ。

「なあ、結衣

「ひつ！ 嘘です、ちびりました！ だだ漏れです！」

俺が呼びかけると、結衣は恐怖に顔を見開く。

「いや……怒鳴つたりして悪かつたな。別にこいつがひかれたのもあんたらの責任じゃないし、用があるなら付き添う必要なんてないんだぞ?」

俺が言つと、結衣はじつと俺を見つめ、そして、伏を見つめた。

「…………」

伏はあれからかなり時間が経ったにもかかわらず、まだに交通事故故遺体にしか見えない。

何でこんなに回復が遅いんだよ。

ナイフで刺しても呪い殺してもすぐなんだぞ？

「ねえ、この子、どれくらいで回復するの？」

結衣が親父に聞く。

「さあね、ナイフに刺されたくらいなら数秒で直るんだが、ここまでの大怪我となると、全く分からぬ。数時間なのか、数日なのか、数年なのか……」

親父が腕を組んでため息をつく。

俺も、何も言えなかつた。

今回の事故は誰のせいでもない。

言つてみれば伏の自業自得だ。

だが、ここにいる全員、自分がどうにかすれば事故が防げたと思つていい。

不老不死でも痛みがある。

どれほどの激痛で、これからどれだけ眠り続けるのだろう。

俺だつて苦しいが、無関係な結衣や樋田までそれを背負い込む必要はないだろう。

「なあ、あんたはもう一旦帰……」

「樋田っ！」

思いつめた表情のまま、結衣は樋田を呼ぶ。

「ホテルから試薬の7番と9番持つてきて！ 大至急！」

なんだか分からぬが、天才科学者である彼女が、何らかの対策をしようとしている。

「所長……」

樋田が、驚いたように声をかける。

「早く！」

何も聞くな、とばかりに結衣は樋田を急かす。

「自分で行つてきてくれさい」

「うわーん！」

結衣は走つて出て行つた。

なんだこれ。

「……鬼だなあんた」

呆れた拓海が言つ。

「そうでもないですよ」

樋田は立ち上がる。

「所長はどうせ道に迷うでしょ、だから、僕も行つて来ます」
そう言つて、ゆっくりと立ち上がり、出て行つた。

いや、だつたら最初から行けよ。

一時間後。

結衣が泣きながら戻つてきた。

「なかつた！ どうしてか、7番と9番だけなかつた！」

さつきまでの静寂が一転大騒ぎになる風樓家。

「僕がタクシーで取つてきましたよ。ほら

樋田が試薬のビンを見せる。

「何でこんなことに！」

「所長が取つて来いと言つたんじゃないですか」

「言つたけど！」

……本当に鬼だな、こいつ。

「そんな些細な事より、この試薬を使うんでしょう？」

「そうよ！ 細胞の増殖を高める薬と、アポトーシス（細胞の計画的な死）による死滅を高める薬」

ずい、とそれを前に突き出す結衣。

なんだかよく分からぬが、それがどうしたんだ？

「つまり、細胞の入れ替えを大幅に促進する薬です。試作品なので、多少調整されていない」ところもありますが

樋田が付け加える。

そういうえば試薬つて言つてたな。

「大丈夫、なのか？」

俺は心配になつて聞いてみる。

不老不死とはいへ、俺の妹に変な薬投与されても困る。

「さあ。全く分かりません。通常の人間でもまだ調査段階なのに、おそらく細胞の動きが通常と異なる彼女に通用するかどうか」

「大丈夫！」

結衣が断定する。

「所長、科学者が根拠のないこと言わないでください」

「大丈夫！ 私が保証する！」

真剣な表情。

いつものどこか抜けてて、どつちかといつと可愛い表情じゃなく、研究者然とした真剣な表情。

「分かりました。拓海さん、やらせてやつてください」

樋田が頭を下げる。

「こんな顔の所長は研究中にしか見たことがありません……こんなことを言つのは残念でたまりませんが、私が唯一尊敬できる所長の表情です」

まあ。この樋田がこんなことを言つのなら、間違いないだろ？。「万一失敗したら、所長が代わりに妹になりますので」

「うん……ええつ！？」

「いや、それはいいけど……分かった、頼んだ」

騒がしい妹は一人いれば十分だ。

その妹を何とかしてくれるならそれでいい。

「じゃ、やるわよ、樋田！」

「はいはい、我々医者じゃないんで医療器具は持ち合わせてません。本当は点滴注入が一番だと思いますが、そんなものはありません。多少時間はかかりますが、皮膚からの浸透と、鼻や口からの服用しかないでしょうね」

樋田は相変わらずの口調でそう言つた。

その口調が今では安心感になつてゐるから不思議だ。

「うん、じゃ、やるわよ！ 横田、メスシリンドナー！」

「ホテルじゃないですか？」

「何で持つてこなかつたのよ！」

「持つて来いと言わせんでしたし」

「ああああ、もうつ！」

結衣は試薬品を目分量で混ぜる。

つて、目分量かよ！？

「だ、大丈夫なのか、それ？」

さすがに不安になつて聞いてみる。

「大丈夫！ 多分！」

「全然大丈夫じゃねえ！」

先ほどは全面的に信じた根拠のない大丈夫も、今度はさすがに信じられなかつた。

まあ、今さらやめるとも言えないし、任せた以上見守るしかないな。

「皮膚からは怪我のひどいところだけ、後は鼻から注入するわよ」
結衣が指示すると、横田が試薬をまずは頭部に塗る。

彼女のほうは鼻から入れようと思つたが、管がないので口を開けて流し込んだ。

機能が半停止している伏は飲み込まないが、喉の奥まで開かせて強引に流し込む。

「ちょ、ちょっと待つてくれないか？」

横田が伏の服を脱がそうとしているので、とりあえず止める。

「何ですか？ これは緊急医療行為ですよ？」

医療行為認めちゃ駄目だろ。

「いや……そこは出来れば、結衣がやつてくれないか……？」

まあ、裸を見られるのは仕方がないにしても、服を脱がされるのは出来ればやめていただきたい。

「大丈夫です。僕は熟女属性なので、彼女くらいの年齢には興味あ

りません」

「いや、そんな堂々と嘘をつかれても困るが……」

樋田が結衣をどう思つてるかなんて知つたことじやないけど、まあ、少なくとも樋田が熟女属性でないことは分かる。

「分かりました、では同性に興味津々の所長お願いしますわ」

「え？ え？ 何のこと？」

「いやもう、俺が脱がすから……」

「しようがなく俺は伏の服を脱がす事にした。

起きてたら泣いて喜んだだらうなあ、こいつ。

そうしてしばらく口から流し込んだり、皮膚から塗つたりして、薬を使つた。

「これでやれる事はやつたわ。後は結果を待つだけよ」

ふう、と、一息つく結衣。

「樋田、口ア！」

「ありません。人の家ですよ。何か他の事してくださー」

「何もすることないわよ」

結衣は疲れたように、ソファに沈む。

「とりあえず、拓海さんをお兄ちゃんと呼ぶ練習をしておけばどうですか？」

「え？ え？ ……お兄ちゃん？」

戸惑いながらも、とりあえず俺をお兄ちゃんと呼ぶ結衣。

なんだ、この殺傷能力は！

ツインテールでゴスロリの上田遣いには殺傷能力がある、と常々親父に言われてたが、本当にここまであるとはな。

一瞬本当に妹にしてしまいたいと思つたくらいだ。

だが、心に決めておこつ、俺の妹は伏一人だ。

「いや、もし失敗しても、俺の妹は伏だけだからいいってすまん、伏。俺、一瞬だけど心が揺らいだ。

「何を言つてるんですか、拓海さん。所長はどう出しても恥ずかしい妹ですよ」

だらうな、こいつと一緒に歩いてたら恥ずかしくて仕方がない。

「だつたら余計にいらないんだが……」

「樋田！ あんたは何でそんな事しか言えないのよー」

結衣はいつものように怒り出す。

樋田は平然と流す。

そんな、風樓家の面々をもしても馴染みとなつて来た光景。

彼らの言動に目と耳を傾けていた全員が、その光景を見逃していった。

「あれ……？ ここは、家……？」

俺にとつてそれは聞きなれた声。

俺の思考が一瞬止まる。

さつきまではありえないと思つていたことが、聞けないと思つていた声が今聞こえてきた。

俺は、物凄い勢いで振り返る。

伏は、不思議そうに俺を見返した。

「痛いっ！ あれ……？ あ、私、車に引かれて……」

痛みと戸惑い。

伏は周囲の様子つかがう。

「あれ……きや！ どうして私、服脱いでるの？」

体を隠そうとする伏を、俺は抱きしめた。

「お兄……ちゃん……？」

どまどつた表情のまま、だが、伏は慌てることもなく、俺に身をゆだねた。

「よかつた……お前が無事でよかつた……」

さつきまで紫色で膨れていた伏の身体は、白く細い肌に戻り、髪も、頭の形も元のままだった。

「お兄ちゃん、私は殺したつて死ないよ？ 大丈夫だから……」

俺を優しく慰める。

何でそんなことを言つんだよ。

ああ、俺が泣いてるからか。

抱きしめていた俺はいつの間にか伏に頭を撫でられて泣いていた。撫でられながら、俺はもう絶対こいつを苦しませる真似はしない、と誓つた。

幕間 研究者の退却

「所長」

「二人の様子をほつとして見つめていた結衣の肩を叩く樋田。

「何よ」

「帰りましょ」

樋田が結衣に囁きの声で言つ。

「？ どうして？」

「全て、解決したからです。」 つゝつ時は感謝を言われる前に去るのが、一番格好いいのですよ

「うん、じゃあ、帰ろうか」

結衣と樋田は抱き合つ一人と、それをほほえましく見守る父を背に、玄関に向かう。

玄関で樋田はさつさと靴を履いて、結衣が履き終わるのを待つ。

「さつさと履いてください」

樋田が急かす。

「分かってるわよ！」

彼女の靴は、服に合わせて特殊なもので、履くにも脱ぐにも時間がかかるものだった。

そうこつじしているうちに、拓海が追いかけてきた。

「なあ、一人とも今日は本当に」

「見つかつた！ 逃げないと！」

何を思つたか、結衣は履きかけのままの靴で慌てて逃げ出した。
「すみません、うちの所長馬鹿なんです。それではお騒がせしました」
残つた樋田が、何の反応も出来ない拓海に一礼をして、玄関を閉めた。

それからはまたいつもの生活が始まった。

朝起きると伏に会い、一人で学校に行き、伏と一緒に帰る（時々、真希も）。

夜には伏が襲撃をかけてきて、俺がそれを撃退する。

面倒だと思つていたそんな日常が、今は少しだけありがたく思える。

あの事故はそれを教えてくれたとも言える。

もちろん、あの事件があれで済んだわけじゃない。

街中の大通りで、車にはねられた被害者を、数人の者たちが連れ去つたわけで、目撃者は大勢いる。

さすがに風樓家と裏でつながつている有力者の力を借りざるを得なかつた。

幸い、近場で見た者は関係者以外おらず、どこの誰とまで特定される事はなかつた。

はねられた時に制服だったため、高校は特定されたのだが、翌日全員登校して来た事で、被害者がいない事が証明されてしまった。

その後もしばらく調査もあつただろうが、結局それ以上の手がかりはなく、被害者が消えてしまつたため、早々に迷宮入りとなつた。もちろん噂が全てなくなるわけじゃないだろうけど、これ以上新しい事実がない以上、いつしか都市伝説の類になつて行くことだろう。

結衣と樋田には、あれ以降会つてない。

俺としては礼の一つも言いたかったし、怒鳴ったことももつとちゃんと謝りたかったが、よく考えるとあいつらのホテルすら知らなかつた。

それからしばらくして、1リットル瓶の試薬混合液が送られてきた。

住所が東京だったので、そのまま帰つたんだろう。
また同じようなことがあつたら使え、ということだらう。
ありがたい、本当にありがたいが、俺はこれを二度と使うことはないだらう。

俺が伏を守る。

だからこんなものはもう必要はない。

そんな誓いを新たにしながら、俺はベッドにひたさん、と寝こもる

だ。
「ん？」
天井からJOJOキャッチャーみたいのが下りてきた。

何だこれは？

そんなことを疑問に思つてゐる間に、それは俺の股間をむんず、とつかんだ。

「フオオオオオツ！」

何だ、誰の仕業だ！ 分かるけどさー。

そう思つていたら、入り口のドアが開いだ。

「ふふふふつ！ 引つかつたわねお兄ちゃん！ これで私は手を一本残したまま！ 後はお兄ちゃんを犯るまでよつ！」

勝ち誇つた伏の表情。

くつ、これまでか……！

まあ、最近はそれも悪くないと思つてゐる。

あの事故が遭つた時、俺は絶望したし、死ぬほど後悔した。

少なくとも、俺は伏が好きだ。

それが女としてなのか、妹としてなのかは分からない。

とにかく俺はこいつと一緒に生活したいと思つてゐる。

伏がそれを望むなり、それもいこと思つた。

「覚悟はいい、お兄ちゃん?」

下半身裸の伏が、俺の上に跨る。

その表情は勝ち誇つていた。

……あー、やっぱり嫌だな。

可愛いし、こいつの願いは全てかなえてやつてもいいこと思つてゐ
が、なんかこいつに負けてそういう関係になるのは嫌だな。

だが、この状況はどうしようも……あれ?

どうしようもないのは俺だけじゃないよな?

「なあ、お前、これからどうするつもりだ?」

「そんなの言つまでもないよ、お兄ちゃん」と一つになるのよ

頬を押され、照れた様子で言つ。

あー、まだ分かつてないんだこいつ。

「それつてどうやるんだよ」

「そんなこと言わせるの? 分かつたよ、お兄ちゃんのおちこちん
を私の……ああああああつー」

「やつと詰づいたか。

俺のマイサンはマジックハンドみたいなのが掴んでるので、それ
がある限り伏もどうにかすることが出来ない。

マジックハンドをえなくなれば、俺は自由になり、策略なき近接
戦で、俺が伏に負けるいわれはない。

「くつ……! 覚えてなさいよ、お兄ちゃんー」

伏は下半身裸のまま部屋を出て行つた。

「おーい、これ何とかしてから行つてくれ……」

俺は股間をマジックハンドに掴まれたままだつた。

「ひつひつ毎日がこれからも続くんだろつなあ。

ま、それも悪くない、何度も言つがやつ思えるよう、最近はな
つてきた。

妹は不老不死。（後書き）

一応ここまで完結です。

続きを書くかどうかはリアクション次第です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3213ba/>

妹はふろうふし

2012年1月8日20時52分発行